



水の聖域
藤の姫君

巫女の終焉

hatuhi

自分が特別だと知ったのが、いつか知らない。

ものごころついたときには、もう、自分はじぶんだけのものではないと知っていた。

なにもかも、自分で決めることは許されないことを知っていた。だから、できるだけのことをしよう、と、決めた。

目の前で顔を伏せて、すまない、と呟く長に。

自分を可愛がってくれた、自分を「利用」しなければならないひとに、彼女は微笑んだ。

「長さま。これは、わたくしの、我が儘です。藤が言い出したこと、藤が望んだことです。斎女さまが.....睡蓮さまが斎女さまになられたのですから、わたくしは、わたくしのできることをしたい」

巫女を欲しいと望んだのは、都の貴族、しかも四方家の一角である東の、よりによって嫡子だという。それなら、逆らえるはずも無い。

それに、何より、睡蓮が斎に入り里から去った以上、自分が残ることはできない。

そう、睡蓮が斎女として里から姿を消せば、残った自分は唯一の巫女となってしまう。

幼い頃から姫と知られていても、その前提は睡蓮の存在だった。それがなくなるとは、里のバランスが狂ってしまう。だから、睡蓮が去るのなら、自分が去る定めでしかない。

そして、都からの「風」は、その運命なのだ。

彼女は、知っていた。

それはたぶん、ずっと前から。

幼い日の記憶

最初に、睡蓮の存在を知ったのは、まだ幼い頃だった。

たまに訪れる長の館にはまだ他に子ははず、従って、里の子どもたちのなかで最も尊い存在として、白藤はあった。大人たちさえ「榊の姫さま」と敬って呼びかける彼女に、親しく近寄ってくる子どもはいなかったから、彼女の一日は、父か母に従って何かをすることで埋まっていた。

まだ、五歳か六歳か、そのくらいの頃にはかなりの文字を覚え、父の書齋で読める本を探し、母には刺繍を習っていた。天性の資質か、子どものもとは思えない彼女の上達ぶりを、母は喜ぶというよりは、さすがは姫、と、どこか距離をおくようなところがあった。

それさえも、彼女にとっては当然のことでしかなく、気にすることはなかった。

母の気詰まりさを察したのか、たまに父が長のところへ連れ出してくれ、長の妻である小百合がなにくれとなく可愛がってくれた。それが不思議で仕方なく、一度、父に尋ねた。

「奥方さまが、わたくしを、とてもかわいがってくださるのは、なぜでしょう、お父さま」

五、六歳の子どもがもつには似合わない疑問に、父は真面目に答えた。

「お前は覚えておらぬだろうが、お前と同じ年、月のみ違えて生まれた御娘は、お前とおなじ黒い髪と藍色の瞳の姫で、一歳の頃より巫女の宮にお入りになっている」

「巫女さまは、わたくしと同じお年なのですか？」

「そうだ、白藤。そなたも候補だったのは知っているだろう？」

「はい。姫の名をいただいていますから。お母さまがわたくしにご遠慮なさるのもそのせいでしょう？」

例のない、二人巫女。

しかも、古代の姫神に生き写しと言われる、黒い髪に藍色の瞳を揃えて。

二人共を巫女としなかったのは、前例がなく神殿が躊躇ったからだ。

そのことを、幼い彼女は誰に聞かされるでもなく知って居た。

だから、彼女はほんの少し躊躇って、それから父に尋ねた。

「お父さま。その巫女さまは、お名前をなんとおっしゃるのですか？」

「睡蓮さま、だ。口には出さぬように」

「はい。……巫女さまは、宮で、修行の日々を送っていらっしゃるのですよね？お父さま」

「そうだ」

「では、お父さま。わたくしも、外でできる修行をさせてくださいませ。文字も、もっと覚えて、早く神殿の本を読むようになりたいのです。……もちろん、お母さまにおしえていただく、機も刺繍もおそろかにはしません」

白藤の、珍しい主張に、榊は軽く笑んだ。聡明な姫は、彼の誇りでもあったから。

「分かった。時間が取れるときに教えるから、母上のご用がないときに書齋に参れ」

「はい」

このときから、白藤の、特別な教育が、始まった。

ほんの一年と少し、瞬く間に文字を習得した白藤は、神殿の書庫にまで足を伸ばすようになっていた。

神殿は基本的には神官のみの場だが、巫女としての資格、つまり「姫」である白藤は、神官にも敬われる立場だった。幼い彼女のために見習いの神官がつけられ、里の歴史、そして現在の都の歴史、地誌、様々な薬草や花々の知識に至るまで、彼女は貪欲に吸収した。本を読まない時間は、水の里の姫としての教養やたしなみを母から丁寧に教えられ、父からも厳しい目が注がれた。

水の里の姫として、水の里、水の姫に絶対に忠実であるように。

そして、近い将来、宮を降りる巫女の話し相手として、出過ぎることのないように。

さらに、将来里を率いる立場に立ち得る彼女自身が、何事にも困らないように。

厳しい教育は、聡明な少女に水がしみこむように彼女を鍛え、十歳を過ぎる頃には、同じ年頃の里の子どもなど比較にならないほどに、彼女は気品と知性を兼ね備えた姫に、子どもというには大人びすぎた少女になっていた。

姿こそ愛らしさを残していたけれど、榊の姫さま、と大の男が呼びかけても、何の違和感もないほどに、彼女は誰よりも気高く賢く美しく、そして、何故か、どこまでも謙虚だった。

娘らしく、華やかにのびやかに笑って過ごしたのは、睡蓮が十二歳で宮から下がってからの三年半。

はじめて姿を表した巫女姫は、白藤とあまりに良く似ていた。

そのために、白藤はさらに他の娘たちから遠ざかったが、二人はまるで引き離されていた双子の姉妹のように、お互いに引かれ合い、ふたりで過ごすことを好んだ。この時期のふたりは、巫女として、姫として、という姿より、華やかに笑い、嬉しそうに話す、当たり前のような娘のような姿を見せた。

たった三年半の、輝くような日々は、あまりにも唐突に失われてしまったけれど。

姫という名、そして都

「長さま。直接に、里のお役に立てないことを、どうぞお許しくさいます」
ひざまずき、深く、頭を下げた白藤の黒髪が、磨き上げられた床に滑り、撓む。
澄んだ声音は、宮に赴くと告げた娘の声とあまりにも似ていて、長は唇を噛み締めた。
「白藤、そなたひとりに負わせることを、どうか、許して欲しい。榊の兄上には、申し訳もない.....たった一人の娘御だというのに」
「長さま。わたくしは、榊の娘という前に、この里の「姫」です。里のためにあることが、わたくしの至上の義務。長さまがそのようなことを仰るのは筋違いでございます」
十六になったばかりの彼女は、ゆっくりと微笑んだ。

都で王家に次いで格式の高い、四方家の正殿、その中央にある広間は、正装した人で埋まっていた。
針を落としても響きそうな静寂の中、正面の上座に座る男女の前に、白藤は進みでて、座った。

目の前に座すのは、都でも最も権威の高い、王家に次ぐ四方家の当主と、王家の血を引く正妃。
それに正対した娘の藍色の瞳が強い光を宿し、額に輝く神宝が煌めく。
「.....そなたが水の里の姫か」
壮年の東の当主、天藍の言葉に、白藤はただ視線のみを返した。
全く表情のない美しい顔の中で、藍色の瞳だけが強く東の当主を射る。
「.....礼をなさいます、無礼でございます」
彼女の脇に控えていた女官がそう言い、彼女は老女官を一瞥し、それから天藍に向き直り、はじめて口を開いた。
「都を司る東の君」
銀の鈴を振るような、澄んだ声音は、大きくはないがよく通り、広間を緊張が走った。
敬意をこめてはいるが、全く対等の話し方だったからだ。
東の当主に向かって、対等に口をきくのは、同じ四方家当主と、王家の直系しかいない。
「この女官の申すこと、東の君の御意とうけてよろしいか？」
高まる緊張に気付きながら、まったく怯まない、凜、とした声が響く。
「.....私の意、とは？麗しき水の姫よ」
彼女の態度に何か感じるものがあつたのか、天藍は無礼を咎めない。横で藍妃が眉を寄せているが、東雲は無表情を保っていた。
「わたくしは水の姫。水の姫が礼をとるということは、水に礼をとれとの仰せと同じこと。それを、お望みか」
「水の姫は、睡蓮、という姫と聞いたが」
「たまたま、わたくしがいただけのこと。姫神のもとに睡蓮が赴いた以上、水の姫神の血を継ぎ、水を守る巫女はわたくし以外にはいない。お疑いなら、随行の神官にご下問を」
「.....疑うわけではないが、確認させてもらおう。.....水の神官どの、この姫の言われることは？」
神官のうち一人が、恭しく頭を下げ、そして顔を上げて、どこか誇らしげに言った。
「姫君の仰せに間違いはございません。斎にはいられた睡蓮さまとこちらの姫君は、お年も同じ、生き写しのお顔にして、全く同じ藍色の瞳を継がれております。いにしへの姫神さまは藍色の瞳と伝えられておりますゆえ、おふたりは数百年に一度の、姫神さまの血を濃く継がれる貴い御身にあられます。代々のどの巫女姫よりも水に愛される姫を、都にお送りしたのは、水の長、水の神殿、巫女殿の協議の上、こちらに特段の敬意を表してのこととご承知置きいただきたい、と、神官を代表して申し上げます。本来なら、お興入れなさるお立場ではございません」
「水の里は水を治め、清く保つこと、そして都は人と地を治め、和を保つことが、いにしへの約定。都ではお忘れか」
畳み掛けるように問いかける白藤の声は、糾弾に似て響いた。
「水を従えることを都が望み約定を違えるのであれば、水の里も約定を放棄するだけのこと」
彼女の額で、瑠璃色の宝玉が光をもった。
強い口調は譴責に近く、光を孕んだ藍色の瞳は天藍を見据える。
年齢などまったく感じさせない威厳に、東の当主は怒りよりも興味を持ったようだったが、控えていた都の神殿の神官たちは慌てた。

彼女が口にした、古いふり約定は、既に伝説となっているが、確かに伝えられている。
そして、水の里が約定の放棄まで言ってきたことは、記録にある限りかつて一度も無い。
まして、彼女は伝えられるとおりの姿をしている。

「僭越ながら天藍さまに申し上げます」

神官の一人が、重々しく告げた。

「いにしへの約定はまことのこと、水の里なしに、このくにの水の清きは保たれませぬ。姫君、都の神殿を代表して申し上げます。水の里に対する敬意は変わってはおりませぬ、故に、この場に我らがいるのだとお察しくださりませ」

白藤は、視線こそ向けたが、答えない。

天藍は、彼女を連れてきた息子を見やり、それから頷いた。

「水の姫。私はあなたを疑ったわけではないが、誤解を招いたことは詫びる。水の里には、これからも水の守りを願いたい。水の神官どの、そのように伝えられよ」

「承りました」

水の里の神官が、誇らしげに一礼する。

「では、東の君。わたくしを水の巫女姫とお認めになられるか？水の巫女姫が東の風に招かれたと」

「認めよう。………妃も依存はあるまい？東の嫡子に、貴い水の姫が嫁すること、誉れとなろう？」

「我が君の仰せのとおりに」

不満はありそうだったが、藍妃は頷き、美しい娘に目を向けて、そして頷く。

「加えて、美しい姫君を迎えることを喜びといたしましょう」

ふたりを見つめ返し、白藤は微笑んだ。

「では、水の守りの約定は、守られよう。わたくしは、東の風のなかで、水の清きをいのることといたします」

そう言って。

白藤は、座っていた函の上からそっと降り、ひざをついた。

すかさず神官が差し出した、別の宝物入れに、黒髪をきらめきで彩っていた神宝の額飾りを外し、丁寧に入れる。瑠璃色の珠には額をつけて目を閉じ、それから白藤は改めて正面に向き直り、丁寧に一礼した。

水華

突然の態度の変化に、広間が小さなざわめきに包まれる。

「……………水の姫？」

いぶかしげな天藍の声に、東雲が小さく笑った。

「父上、どうやら合格のようです」

「……………合格？」

「彼女は真に水の巫女姫。ですから、それを認めないのであれば、妃として立てぬ、ということです。神官どのが心配なされたように、約定の問題もあった」

「東の天藍の君、そして藍妃さま」

呼びかけた声は、やわらかな響きを帯びて、今度はこちらが水晶のたまゆらのようだった。

「立場上、いたしかたなきこととはいえ、無礼な振る舞いをお許しくださいましたこと、感謝いたします」

「これはまた……………同じ姫とも思えない」

面白がるような天藍のことばに、白藤は視線を落としたまま答えた。

「お言葉を返すようではございますが、同じ姫ではございません。水の巫女姫として、都にひれ伏すことは許されません。巫女のみがつけることを許される神宝を、下げるわけにはまいりません。ですが、今のわたくしは、衣装こそそのままではございますが、東雲の若君さまに呼び名を頂いた、ただの娘でございます」

「東雲、名は？」

「水華、と呼ぶことにしました、父上」

「過分なお名を頂いたと思っております」

「過分とは思わぬな、のう、藍妃？」

「水の花、とは、随分良い名を思いつきましたね、東雲」

「母上、お聞きになってお分かりとは思いますが、水華はとても特殊な姫です。もともと妻となる立場になかった上、都とは全く違う秩序の中で、貴い姫としてあった、まさしく巫女姫にほかなりません。姉上がたや、月待とは違います」

「そうですね。……………これほど気高くあつては、殿方に気後れされてしまう。月待も気位の高い姫ですが、この姫は全く種類の違うもの」

さきほどの彼女に気圧された意趣返しも入ったような、皮肉の混じったことばに、白藤は頭を下げた。

「藍妃さまには、よろしくご指導くださいませ」

「東雲。すぐに妃におくのか？」

「そうしたいのは山々ですが……………父上はどうお思いですか？」

「正妃でかまわぬだろう。そうは思わぬか、神官どの？」

「は。……………巫女姫として貴いお立場にあられるうえ、非常に聡明な姫君とお見受けしましたゆえ、東の正妃としても問題はないかと」

「そうか。王家にもそう伝えてくれようか？」

「承りました」

神官と夫のやりとりに、藍妃が口を挟む。

「あなたがそうお決めなら異存はございませんが」

「藍妃は不満か」

王家の姫として生まれた正妃に、天藍は問いかけた。

「……………美しい、聡明な姫であることは否定いたしません。ですが、水華姫は少々特殊なお育ち。水の聖地と都では、色々と違うこともございましょうし、素養など、どのようなことを身につけられているかもわかりませぬ。少し様子を見た方がよろしいでしょう」

「ふむ。東雲、母上の意見はどう思うか」

「私もそれを思っております。私の邸内に彼女の部屋はしつらえるつもりですが、婚儀はしばらく後にしたほうが良いと思っております。まして、正妃とできるのなら準備もきちんとしてやりたい」

「そうか。水華姫、それで良いのか？」

「東雲さまがそうお決めなら、わたくしはそれに従います」

ゆったりとした口調で答え、東雲に微笑みを向けた美しい姫に、天藍は改めて感嘆したように言った。

「それにしても、美しい姫だな、東雲。そなたがどうしてもと珍しく強情を張ったわけがよく分かった」

「化粧もなく飾りもなく、これだけ美しいのです。もちろん水の里の衣装は清楚で美しいですが、都の華やかな衣装をつけ、飾りをつけたらどれほどに華やかに美しい姫になると思われますか、父上。それに、なにより、藍色の瞳が、夜明けの空のように美しいのです」

賛嘆した息子の言葉に、東の当主は磊落に笑う。

「お前が惚れ込んでいるのはよく分かった。……………さて、水華姫」

「はい、何かございましたでしょうか」

「疲れているとは思いますが、我が末の姫があなたにひとりでお会いしたいと言っている。会ってやってはくれぬか？」

「はい、月待ちの姫さまのことは東雲さまより伺っております。喜んで参ります」

「父上、さすがに水華ひとりで月待の相手は荷が勝ちます。私も参ります」

「それは好きにすれば良い。あれに追い出されるのはそなただしな」

天藍は磊落に笑い、そして妃たちに聞く。

「藍妃には聞いたが、他の妃には聞いておらぬな。何か異存はないか？ 臣どもは？」

問いかけに、脇に座っていた三人の女性は白藤に軽く会釈することで答えとし、家臣を代表して老臣が立った。

「東雲の君の、初めてののお妃が、これほど美しく聡明、かつ貴い巫女姫であることは、東の隆盛のさきがけとも思われます。おめでとうございます」

祝いのことばに、臣下たちが唱和する。

東雲は笑って立ち上がった。

「ありがとう。……父上、母上、では私たちは月のところへ参ります。灯草、部屋の手配を」

「万事承知しております、若君」

配下に手配し、彼は白藤に手を差し伸べる。

彼女は、穏やかな微笑みを浮かべ、丁寧に一礼してから東雲の手をとった。

月待

東雲の帰還の報と同時に、神秘的で美しい巫女姫のことを伝えにきた侍女に、年若い高貴な姫は軽く眉を寄せてみせた。

「……………お美しい方だから、あのお兄様が、お父さまを押し切ったんでしょう。そんなことは分かっているわ。それより、私の支度を。言ったとおり、揃えているわね？」

月待の指示は、迎える部屋の室礼から衣装の細かい装飾まで多岐に渡っている。

「姫さま、やはりお一人でお会いになるのですか」

「もちろんそのつもりよ」

「せめて、わたくしだけでも控えさせてくださいまし。ご用がおできになったときにお困りでしょう」

懇願するように言った若い侍女は、姫お気に入りの話し相手でもある。

おそらく、古参のお目付役の侍女たちから何か言われたのだろうが、月待は溜息をついただけで頷いた。監視されることには慣れている。

「いいわ。おまえだけなら」

「ありがとうございます！」

「でも、それなら私の着替えは他の誰かに任せて、おまえはちゃんとした衣裳に着替えてきなさい。くれぐれも失礼のないようにするのよ、わかってるわね」

月待の念押しに、侍女は繰り返して頷いた。

「はい、姫さま。奥の間に、姫さまをお待ちしております」

彼女は、慌てて頭を下げて、大急ぎで戻っていった。

本来貴賓を迎えるときにしか身につけない正装に、わざわざ着替えた月待に、特に古株の侍女たちは何か言いたげだったが、言っても姫の逆鱗に触れるだけなのは分かっているから、何も言わなかった。

部屋の調度も、落ちついた白と金銀でまとめて、アクセントに藍色を使っている。

天空を冠する、東家の正式な装飾だ。

「……………月姫さま。兄上さま、ならびに水の巫女さまがおいでにございます」

「分かったわ。くれぐれも巫女さまに失礼のないようにお通して。……………私がお招きしたのは、巫女さまで、兄さまじゃないわ」

「……………分かりました」

「他の皆も、下がりなさい。呼ぶまで誰も来ないように。……………ああ、鈴音は残っていいわ」

「はい。鈴音、姫さまを頼みましたよ」

「はい」

月待の乳母のような侍女に一礼して、鈴音は姫に向き直った。

「姫さま、本当にわたくしだけで……………」

「もういいわ、控えなさい。おいでだわ」

「あ、はい」

少女が慌てて入り口に近いところに移って深々と頭を下げたとき、苦笑まじりの声が出た。

「月姫、いくら私がいると言っても、人を払うのはこの人に失礼じゃないのかい？」

笑みを含んだ声が出て、すっと扉が開かれた。

「あら。お兄さまが案内していらしたんでしょう？」

「やれやれ……………。月、彼女が水の巫女姫だ。水華とよぶ」

東雲に手を取られ、ゆっくりと部屋に入ってきた「水の巫女姫」は、美しい黒髪を結わずに流し、珍しい形の衣を着ていた。一見簡素に見える上着には、細かい刺繍が艶のある糸で施されていて、光が当たると浮き上がるのが美しい。

白い肌、黒い髪、そして、月待を見つめる瞳の深い藍色が、ひどく印象に残る。

月待は、座っていた牀机から床に滑り降り、彼女の身分としては最高の礼をとった。

「貴い水の巫女さま、ようこそ、このようなところにおいでくださいました。東雲の妹、月と申します。いまは月待と呼ばれておりますのでそう呼びくださいませ」

「月待の姫さま、どうぞお顔をお上げくださいませ」

やわらかい口調でそう言って、顔を上げた月待のすぐそばにひざをつき、白藤は微笑んだ。

「初めてお目にかかります、月姫さま。水の里から参りました。藤、と申します」

「……………水華、だ。月」

訂正を入れた兄に目で頷き、そして月待はあらためて兄が強引に連れてきた巫女姫を見つめ……………溜息をついた。

「お兄さまが、お父さまを強引に押し切った理由が分かりますわ。なんてお美しい方なんでしょう」

素直な感嘆の声に、白藤は苦笑する。

美醜を論じることのない水の里では、睡蓮の気高さは讃えられたけれど、美しさを讃嘆されたことなどない。

「過分なお言葉にございますわ」

「お兄さまにお聞きになってくださいませね、水華姫さま。わたくし、お世辞は絶対に申しませんわ」

「そうだね。月姫がそんなに熱心に褒めているのは初めて聞いたよ」

「では、ありがたくお受けいたしますわ、月姫さま」

「さま、は要りませんわ。水華お姉様とお呼びしてもよろしいかしら？」

「喜んで」

にこりと微笑んだ白藤に、月待は、兄を横目で睨んでみせた。

「わたくしは、水華お姉様とふたりきりでお話したかったのに、外野がふたりもいるなんて」

「初対面の水華ひとりで、お前の相手は厳しいだろう。……………鈴音、毎回だが、ご苦労だな」

「もったいないお言葉にございます、若君さま」

「まあ、わたくし、こんな素敵な方に失礼な真似などしませんわ。鈴音は、多分、ひのかあたりに言われたんでしょう」

「水華は疲れているんだよ、ここまで四日、休みなしだったんだから」

「どなたのせいのですの？」

東雲のことばに間髪入れず入った切り返しに、白藤はこらえきれなくなってくすくす笑い出した。

「……………水華？」

「東雲さま、月姫さまとお仲がよろしいんですね。それに、月姫さまがこんなにお可愛らしい方だなんて思ってもみませんでしたから……」

「水華お姉様？」

「わたくし、姫には嫌われるのではないかと怖れていましたの」

「どうしてのですの？」

「だって、そうでございますでしょう？水の里とはいえ、都からすれば、単なる村娘ととられても仕方ないこと、兄上さまが村娘を連れ帰られては、姫はきっとご不快だと思ったのです」

「……………月待。頼むからそう怖い顔をしないでくれないか。私は何度も否定したよ、そんなことはあり得ない、私が怒られることはあっても、と」

「水華お姉様。水の里の聖なる姫君をこともあろうに強引に攫って来ると聞いたときには、わたくし、激怒しましたのよ？無礼にもほどがございます、って」

「まあ」

白藤は、目を丸くした。

「お母さまもお父さまも、そんなことは無視していらっしやいましたけど、わたくしは、聖域には敬意をはらうべきだと思っておりますの。なのに、よりによってそこで一番貴い姫巫女さまを、なんて……………」

「ありがとうございます、姫。たまたま、巫女がふたりいたからできた離れ業ですの。本来、巫女は殿方に嫁がぬものなのですが、私は、隠れた巫女でしたから。神殿でも、わたくしが知っているとは思っていなかったはずです。わたくしは、たまたま読んだ文献に、似たようなことが一つだけあったので、知りましたの」

「似たような？」

「ええ。巫女の資格は、はっきり記されるものではないのですが、水の里では、長の血筋で水との親和性が高い姫が選ばれます。でも、無条件で姫と選ばれる条件がございます。これは他言無用に願いますね、姫。一応、水の里の秘事ですのよ」

くすくす笑いながら、水華は声を落とした。

これで、扉脇に控えた鈴音には聞こえないはずだ。

「長筋に、黒髪、そして藍色の瞳を併せ持つ娘」

「まあ」

「わたくしも、斎に入られた巫女さまも、この条件を満たしておりました。この場合、長により血の近い方が正しい巫女として立つことになっているのです」

「……………その条件は、どうして、のですの？」

「いにしえ、我が里の祖となられた水の姫神さまが、そうだったと伝えられておりますので」

「まあ……………」

月待は、再び、驚いたようにそう言って目を見張り、口を覆った。

美しい瞳に笑みを浮かべた水の巫女は、抑えた声のまま続ける。

「水の姫神さまの祖となられたのは、創世のとき、光を抱いた紫の君に従った、しろがねの髪に青の瞳の水の精霊だと伝えられております」

「あ、その神話は……………聞いたことがございますわ、お姉様。……………都が滅ぼしたものと」

月待は再び眉を寄せ、声を潜めて続けたが、水華は微笑んで頷いた。

「ええ。そのときに水に入られた姫神が、人と混じって黒い髪を持っていたそうですの。そのあとも色々あったようですが」

「だいたい、都は聖域に干渉し過ぎたのですわ。聖域は聖域、貴いものは貴いものですもの」

「ありがとうございます、姫」

微笑んだ巫女姫はどこまでも透明に美しく、月待は軽く兄を睨んだ。

「わかっていらっしゃいますの？お兄様」

「……わかってる、わかってるよ。私のせいで、水の里は希有な二人の巫女を失うことになった。水華も、もうひとりの、巫女も」

「東雲さま……」

何か言いかけた巫女姫を遮って、月待は続ける。

「分かっているなら結構ですわ、お兄様。そのかわり、水華お姉様が泣くようなことをなさったら、わたくし承知いたしませんわよ」

「わかってるよ、月。この人が都で頼れるのは私だけだ。東の嫡子としての義務はあるが、大切にする」

「まったく、もう……」

「仕方がないだろう。四方妃を置くのは当主の務めだ」

「四方妃？」

藍色の瞳に疑問の色が浮かび、月待は兄を睨んだ。今度はかなりきつい目つきで。

「お兄様……」

「怒るな！説明してる時間がなかったんだ。……水華、さっき正殿に、母の藍妃の他に、三人、女性が居たのを覚えているか？」

「はい。それぞれとてもお美しい方が、華やかなお衣装で」

「都は、東西南北を司る四方家と、王家が中心になって治めている。私と月の母である藍妃は、王家の姫だが、それとは別に、当主は他の三家から妃をめとらなければならない決まりがある」

「それを四方妃と言いますの。自分の家からは出ませんから、実際には三人ですわね。正妃となるのは、嫡子を産んだ四方妃のいずれかですから、最初に嫁いだ妃が有利になりますけれど、王家の姫が嫁いだ時は、必ず正妃となりますわ。自動的に、嫡子もその子になりますの。実際、わたくしたちには、西妃の産まれたお兄様とお姉様がお二人いらっしゃいますけれど、あとを継がれることはありませんわ。お姉様は王家に嫁がれましたけれど」

月待の説明を、巫女姫は真剣な表情で聞いていたが、小さく頷いた。

「姫、そういったこと、たくさん教えてくださいませ」

「お姉様？」

「水の里では、貴いのは長と巫女、そして姫、と呼ばれる巫女候補だった娘だけなのです。こちらの身分はあまりありませんの。わたくしは姫、と呼ばれておりましたから、他の方とのおつきあいはほとんどなかったの、他の男の方はもちろん、娘とも交流がありませんでしたの」

「……まったく、そんな方を正妃争いに加えるなんて……」

「月姫、お怒りにならないで。わたくし、妾妃におかれることも考えておりましたから」

とりなすつもりだろうが、妹姫の視線がさらに厳しくなったのを見て取り、東雲は苦笑した。

「……水華、頼むからそれ以上言わないでくれるかい。でないと私があとでこっぴどくまとめて怒られる」

「おわかりになっているなら結構ですわお兄様。水華お姉様、今日はお疲れでしょうから、どうぞお休みになってくださいませ。お母様と相談して侍女を差し向けますわ」

「お心遣い、ありがとうございます、姫」

白藤は、ふわりと微笑んでみせた。

思惑

目を開けた白藤は、一瞬、自分に何が起こったのか、分からなかった。

横たわっている自分を取り巻く、紗の幕と、見慣れない部屋、柔らかな夜着、そして、耳に入る、清涼な水の音。

心地はいいけれど、どれも記憶にまったくないことが気になった。

起き上がろうと手をつき、目の前が暗くなって思わず枕に倒れ込む。

ばさ、というかすかな音が聞こえたのか、紗幕の向こうに人影が動き、囁くような声が聞こえた。

「水華姫さま、お目覚めでいらっしゃいますか」

丁寧な口調は、藍妃につけられた侍女のものだ。

「はい。……………波速、でしたね。わたくしは、いったい……………」

できるだけ穏やかな口調を保つようにして尋ねると、すっと紗幕が引き開けられ、心配げな表情の中年の侍女が顔を見せ、ゆっくりと息を吐く。

「まだお顔の色がすぐれませんわ。姫さま、どうぞそのままお休みください。藍妃さまより、ゆっくりお休みになるように、と、お言伝がございましたから、何もお気になさらずに」

「申し訳ありません」

言いながら、白藤は記憶をたどる。酷く痛む頭をおさえ、めまいを懸命に押し隠す。

藍妃の勧めで、都の大神官に会うことになり、衣裳を整えて、東の本殿で面会した。

その前にも、藍妃の気の済むように調度や衣類を選ぶのに従い、神官たちと話をし、そして。

正式な接見の間で、天藍と藍妃も同席して、大神官と対面し、しばらく会話をしたところで、それまでも感じていた違和感に似た倦怠感が急激に強くなり、座ってられない、と思った瞬間から、記憶が途切れている。

「……………わたくしは、とんでもない粗相を……………大神官さまの御前で、倒れる、なんて」

「そのことに関しましては、神殿側から謝罪がございました」

波速が微笑んで答えたが、白藤は眉を寄せた。

気にするな、というならともかく、謝罪というのは意味が分からない。

「謝罪？ どうしてですか」

「貴い水の姫を、水気から引き離したために、このようなことになってしまったと。こちらのお部屋は、東雲さまのお館の、もっとも水に近いお部屋です。神官さまがこちらを探し当て、大急ぎで姫さまをお移しいたしました。それでようやくご容態も落ち着かれて……………一時はお熱も高く、東雲さまも大変ご心配を」

「なんてこと……………わたくし、大変申し訳ないことを……………」

そう呟きながら、白藤は半ば冴えてきた頭で、これからのことを考えなければ、と考えた。おそらく、これで色々な思惑が動き出してしまう。

「ご心配なさいませぬように、姫さま。貴い水の姫巫女さまを水の気から離しおいたのは、都側の落ち度、と大神官さまは仰せられました。藍妃さま、天藍さまも、水華姫さまには、くれぐれも大事になさるよう仰っておいでですし、水の里には特使が立ったと聞いております」

「特使……………」

呟いたとき、凜とした声が波速の向こうから響いた。

「波速、水華が目覚めたなら教えるよう言ったはずだ」

振り返った波速は、あとから付いてきた若い侍女を見て、眉を寄せた。

「東雲の若君、水華姫さまはいまやっとお気を取り戻されたところです。楓、勝手に出てはなりません。姫さまのご様子は一度神官さまに見て頂こうと思っていたというのに、勝手に若君をお呼びするとは何事ですか」

「す、すみません……………」

「東雲さま……………」

紗の向こうで起き上がろうとした気配に、波速はさっと紗を下ろし、無理をなさってはなりません、と言ってから向き直った。

「姫さまは夜着姿、東雲さまをお通しはできませんよ」

「神官らは通すのだろう。水華は私の妃、それに不注意は私の責任だ。謝罪くらいさせて欲しい」

「儀式はまだにございます。けじめはつけられませ、若君」

きっぱりと言った波速に迷いはない。主君の嫡子であろうと、幼い頃から見ている上、王族出身の藍妃の侍女たちは強く出られる。

「母上のご意向か」

「さようでございます」

苦い口調になった彼に、きっぱりと答えてから、波速は紗幕の方を振り返った。

紗幕越しに、白藤は小さく告げる。

今、藍妃の意向に逆らってはならないことは、立場を考えればよく分かるが、どう考えても今自分が使える伝手は彼だけだった。

「波速。東雲さまに、起きられるようになりましてらご挨拶いたしますと伝えてください。それと、藍妃さま、天藍さまにお詫びをお伝えしてください、と」

波速が、ため息をついて、復唱するように姫の言葉を伝える。

東雲は、息を詰めてその言葉を聞き、それから、言った。

「水華、あなたが謝られることはない。すべて私の不注意だった。すまなかった。どうかゆっくり休んで欲しい。随行の柏どのはこちらで歓待するが、何か伝えることがあるだろうか」

問われて、彼女は、考えを絞り出した。

柏は、母の兄。伯父ではあるが、長の系列ではない。

今回の、内部事情は、柏は知らない。けれど、長に直接伝えることは、できる。

白藤は軽く息を吐き、波速に頼んだ。

「紗越しでかまいませんから、若君に直接お話をさせてもらえませんか？」

「.....姫さまのお望みなら、仕方がございませんね」

政治向きの話だと悟った波速が一步退き、東雲を招く。

「若君。姫さまが内密のお話があるそうですのでどうぞ。紗ごしならよろしいでしょう。牀机を」

「いや、構わない」

寝台の横に近付くと、彼は紗越しにうつすらと影の見える枕元に、膝をつく。声を潜め、囁くように言った。

「無理をさせてすまなかった。気付かなくて.....この部屋は、都の大水脈から直接清めの水を引いているから、少しは楽になるだろうという神官の所見だったが」

「はい、ありがとうございます。水音を聞いていると、落ち着く心地がいたします。.....このたびは、申し訳ございませんでした」

「いや。あなたの名を却って高めることになったよ。母上も驚いたようだったが、何やらいそいと準備に取りかかっているし、神殿からも何人か遣わされている。あなたは何も心配しなくていい」

「柏の、ことですが.....柏は、母の兄、伯父にはあたりますが、長筋とは関係がございません。ですから、今回のことも、よくは、知りません」

「そうなのか？あなたの伯父ぎみと聞いていたし、堂々とした方だから、地位の高い方だと思っていたが」

「馬と.....そのまわりの、まとめ役ですから、高いと言えば言えるのかもしれませんが.....今回のこと、柏のおじさまは、ご存じなく、また、知らせてはならないのです。.....わたくしが、巫女だということを」

最後の言葉は囁くようで、東雲はしっかりと頷いた。

「分かった」

「それから、神官はともかく、神宝はこちらに長くおいては、水の里に障りがあります。どうか、随行の神官のうちひとりと、柏を、一度水の里に戻しては、くださいませか？.....わたくしがこのようなありさまでは、満足に藍妃さまのお教を頂くこともままなりません」

「それは気にしなくていい。婚儀はあなたが回復するのを十分に待って、それから母上が納得するだけの準備をしてからになる。わたしとしては一日も早くあなたを妻にしたいが、母上からそうするよう言われた」

そう言って、東雲は苦笑した。

「しばらくは仕方がない。あなたが、私のものなことに変わりはないから、それでいい」

その言葉に、紗幕の中で、白藤は思わず苦笑したが、声音は穏やかなまま、告げた。

「柏の、ことは」

「あなたの言うようにしよう。婚儀はどうせひと月はのびるだろうし、使いはいつでも出せる。その頃にまた来るなら来て頂ければ良い。父上には私から説明しておこう」

「では、柏に、言伝を」

「聞こう」

これを言いたかったのだと悟った東雲は、表情を真剣なものにして、耳を澄ませた。

「藤は、都にて、欠けること無く、白藤でおります、と。一句違わず、長さまに伝えるよう」

しばらくその言葉を反芻したらしい東雲は、少し考えて、首を傾げた。

「.....それで、伝わるのか？」

「何か、間違ったことや難しいことを申しておりますでしょうか？」

微笑みさえ、口元に湛え、白藤は言った。

多少具合は悪くしても、自分は損なわれてはいない。

間違いの無い事実だし、そのことを伝える目的もある。

「いや、そうではなくて、あまりにも意味がないように思える」

「里では、わたくしのことを心配しておりましたから.....あまりに突然のことでしたし」

「そうだったな。間違いなく、わたしが忘れないうちに、柏どのに伝えよう。それから、父上に出立の手配の話をしてくるから、あなたは、ゆっくり休んでいなさい」

「ありがとうございます」

ほっとしたような言葉に、東雲は明るく頷き、波速に向き直った。

「節度は守ったぞ」

「そのようにございますね。……………楓」

「は、はい！」

「若君をお見送りして、それから神官さまをお呼びしてきなさい」

「はい、かしこまりました」

若い娘は丁寧に頭を下げ、東雲に従って部屋を出た。

水の姫と聖なる水

東雲の気配が消えるのを待って、波速がもう一度そばにきた。

「姫さま、くれぐれもご無理をなさってはなりません。まる二日、お気を失われていたのですから」
この言葉に、白藤はさすがに驚いた。

「え？二日も？」

思わず聞き返すと、重々しい口調が返ってくる。

「はい。二日もでございます。ですから若君も随分、狼狽されて……………水気の不足、とは、何のことかと」

「わたくしも、全く気付きませんでしたから、東雲の若君さまがお分かりにならないのは当たり前です。……………水から、離れて居たことがなくて、自分でも分かりませんでした」

なんとなく気怠く、引きずるような倦怠感を感じていたが、それがただの疲れとは違うものだと気付くことはできなかった。

「ただ、少し疲れているだけ、だと」

「神官さまによれば、普通の水ではおそらく駄目なのだろうと。水の里と繋がるという聖なる水は、中央神殿と、四方家に清めとして引かれておりますから、そこでなければということで……………たしかに、こちらにお移したとたんにお熱が引かれましたから、そういうことなのでございましょうね」

「失礼いたします、神官さまをお通しいたしました」

入ってきた楓は、跪いて老齢の神官を部屋に通した。

染めていない生成りの長衣を纏った彼は、ゆっくりと寝台に近付き、波速が退いた枕元に膝をつく。

「神官さま、さきほどお気がつかれました」

「巫女さまには、随分と、失礼をいたしましたゆえ、お許しを頂きたく、まずお詫びを申し上げます」

老いてはいるが、張りのある低い声で言われて、白藤は藍色の瞳を神官に向ける。

「都の神官さま。ご迷惑をおかけしました」

「迷惑などではございません。こちらの失態にて姫巫女さまを危ないところまで陥れたこと、深くお詫びもうしあげる次第でございます。こちらは、中央神殿奥の、都で最も水の里に近い水、お飲みいただければ少しはご不快も和らぐかと」

「わざわざ、ありがとうございます」

ガラスの容器に入れられた水は、波速に手渡され、彼女は寝台の白藤を抱き起こし、器を開けて飲むように促す。

白藤は逆らわずこくりと飲み込み、沁み込むような感触に、思わず声を漏らした。

「ああ……………やわらかな、水の気配がいたします」

「それは、なにより」

老いた神官の顔が綻ぶ。

ふたくち、みくち、と水を飲むと、彼女は波速に蓋をさせ、横たわった。

「すこしずつ、頂くことにいたします」

「では、薬湯を煎じて参りましょう。巫女さま、しばらくはご無理をなさりませんよう」

そう言い置いて、彼は立ち上がる。扉口まで付き従った波速が何事か尋ねていたが、白藤は軽く息をつき、天蓋の上を見つめる。

どうしようもない現状が苛立たしい、というよりも既になんだかおかしくて、彼女はちいさくため息をついた。

柏が、彼女の部屋を訪ねてきたのは思ったよりも早かった。

薬湯を持ってきた神官と入れ替わりに部屋の外に立った彼に、波速が厳しい口調で誰何する。

「どなたでいらっしゃいます？」

「水の里より参った、柏と申す」

無骨な伯父の声が聞こえて、波速が眉を寄せる前に、白藤は自ら紗幕をあげた。

「波速、わたくしの母の兄、つまり伯父に当たる方です」

「そうでございましたか。失礼をいたしました」

波速はそう言って、柏を招いた。

「どうぞお入りを」

柏は軽く一礼して室内に入り、豪華な天蓋から垂れ下がる幕の前で、当惑したように立ち止まった。

「柏のおじさま」

紗をかきやった白い手を、波速が押しとどめ、すっと幕を開ける。

「姫君、これは……………」

「聞いていらっしゃいませんか？」

「いや、倒れられた、水気の不足、と、都の神官の方々が言っておられたのは知っておりましたが、ここまでのこととは」

心配、というより、当惑の色合いの濃い伯父の表情に、白藤は笑みを浮かべた。

「おじさま、わたくしも驚きました。……水の里では、あり得ませんから」

「里、といえば、東雲の若君から言伝をお預かりしましたが……あれは、いかなる意味です」

「おじさま。意味が分からなくとも、必ず、そのまま、長さまに伝えてくださいませ。起きられるのであれば文を書きますが、このようなありさまでは……それに、里も気になります」

睡蓮が「斎女」という、白藤でさえほとんど聞いたことがなかったものになり、もう一人残った姫である自分までが都に連れ去られた、という状態のままでは、里は混乱しているだろう。それが、都への敵意に変わる前に、手は打たなければならない。

「起き上がれるようになるまで、しばらくはかかります。ですから、おじさま。一度里に戻って、ご神宝を神殿にお戻しし、長さまに言伝を伝えてください」

「お言伝は、忘れぬよう、書き留めました。違えず、伝えます」

「それから、おじさま。お母様に、どうか、わたくしのことはご心配の無いように、常磐のこのみ気にかけてくださいと伝えてください。……今回のことは、お母様にも秘密のまま進めましたから」

「それでは、あんまりですぞ、姫君。……さぞや悲しんでおりました。突然に手放すことともなれば」

「ですから、そのことも、お願いいたします」

「わかりました、姫君。今日中に準備を整え、明日早くに出立することにいたします。ご挨拶には伺いませんが」

「はい。頼みます」

白藤の言葉に、日に焼けた柏の顔が僅かに歪んだが、彼はそのまま一礼し、控えていた波速にも一礼して、部屋を辞した。

藤は、都にて、白藤として在ります。

言伝の意味は、都にても「水の巫女」の立場を、聖なる水の里の姫として在ることを、決して忘れないという意味だった。

東雲にも柏にも分からなくとも、長と父には分かる。

そのために、自分は、ここに来たのだから。

白藤は自分に言い聞かせるように、もう一度頭の中で繰り返した。

わたくしは、水の里の白藤。姫として、だれよりも里に忠実でなければならない。

斎女となった睡蓮のためにも。

微睡みの中

しばらく、おやすみなさいませ。

そう言って、薬湯を下げた波速が紗幕を下ろすと、白藤は目を閉じた。

内庭に面した窓は開かれていて、水のさざめきが、耳を撫で、ゆっくりと意識が解けていく。

遊んでいる、自分の姿を思い出す。

そう、あれは、ほんのひと月前のこと。

里の外れにある、花畑がとても綺麗だと、家に入出入りする手伝いの人に聞いて、睡蓮を誘った。

あまり外に出ることのない睡蓮は、一面に咲き誇る花々に、驚いたように立ち竦み、そして、満面の笑顔で振り返って、ありがとう、と言った。

実を言えば、自分も、あんな花畑を見たのは初めてだった。

幼い頃から自分の立場をよくわきまえ、学ぶことに貪欲で、何より里のために動くことを無意識に自分に課していた白藤は、自分の楽しみのために何かをしたことはなく、まして、里の外れまで出るようなことはしなかった。したいと思うことすらなかった。

それなのに、あのときに限ってその気になったのは、たまたま薬草になる花を摘みにいったというその人と母が、あの花畑は本当に綺麗だわね、と嬉しそうに話し合っていたのが印象的だったのと、薬草になる花のことを話題にした時、睡蓮が、どんな花なのか見てみたい、と言ったのを覚えていたからだ。

里の中に危険は無い。

睡蓮はともかく、白藤の顔は里のほとんどの人に知られているし、敬意も受けている。

だから、里長は特に考えることもなく半日の外出を許し、ふたりは花畑に出かけた。

よく晴れた美しい日で、明るく微笑む睡蓮が、いつもよりずっと美しかったことを覚えている。

あまりに楽しくて、睡蓮は、あの花畑を刺繍で絵にしたいと、覚えただばかりの刺繍をしようと下絵を描いていた。白藤は、それを楽しく見守っていたし、自分は織物にしてもいいと思っていた。

けれど、そんな楽しみは、十日もせずに壊された。

都からの使いに、何事かと駆けつけた父に同行した白藤は、自分の失態にめまいがした。

自分自身、行ったことの無いような場所に、睡蓮を連れ出すべきではなかった。あの花畑の向こうに、都に続く道があることを、地図上は知っていたのに、気付かなかった。

その向こうに、都の貴族の別邸があることなど、想像もしていなかった。

自分たちに目を留める若者がいることなど、まったく考えたこともなかった。

姿も見せず、遠眼鏡で見っていたのだろう、と、怒りを交えた長の言葉に、白藤は、凝然と立ち尽くすしかなかった。睡蓮とは会うこともできないまま別れ、言伝で、刺繍にしたかった下絵をうつした布と、糸の束を託された。

けれど、それだけで収まるわけもなく、都の貴人は——東雲は、諦めなかった。

睡蓮ではなく自分へと彼の興味を切り替えたのは白藤自身で、それは自分の選択だったけれど、一言の会話もできなかった、そのことだけが、大きな悔いとなって、胸の奥に凝った。

決して、表には出さないけれど。

どうして、と、慟哭する自分がある。

けれど、もう二度と、戻れない。

平和で美しい水の里ではなく、都で生きることを自ら選択したのだから。

水音に揺蕩うようなまどろみの中、白藤の頬に、初めての涙が伝いおちた。

枕辺にて

「姫さま。今日はお顔の色もよろしいようですわ」

波速がそう言うようになる頃には、「水華姫」は、東の家の中で好意的に受け入れられていた。

「ありがとう」

「藍妃さまが、こちらに伺いたいと仰せですが、どうなさいますか？」

「起きられないのでは失礼になるでしょう。起きても構わないかしら？」

思案顔でそう呟くと、波速は微笑する。

「お見舞いに伺いたい、というお言葉でしたから、お休みのままでかまいません。相談事もあるとおっしゃっていましたし」

「藍妃さまが、わたくしに？」

首を傾げたとき、先触れの侍女が現れ、波速は慌てて膝をついた。

地位の高い女官たちを従え、豪華な衣裳の藍妃がまっすぐ部屋に入り、寝台の横に立つ。

「藍妃さま」

起き上がろうとした彼女を制し、藍妃は女官が持ってきた折りたたみ式の牀机に腰を下ろした。

「ようやくお顔の色もよろしくおなりね、水華姫。倒れた時は驚きましたよ」

「申し訳ございません、藍妃さま」

「謝ることはありません、東雲が悪いのですから。……………それにしてもこの部屋の殺風景なこと。東雲は一体何をしているの？波速？」

「申し訳ございません。姫さまのお体を優先するようにとおっしゃいまして、寝台と机など数点を運び込んだ他は、何も」

「何も、どころではないわ。屏風も衝立も垂れ幕もなければ、机も素っ気ない、茶箆筒もなければ衣裳掛けもない、なんですかこの有様は。これではひとつきで婚儀など到底できませんよ」

眉を寄せて部屋を見渡した高貴な女性に、白藤は苦笑した。

この寝台だけでも、自分には十分豪華なのだが、王女として育った彼女には考えられないほどなにもない、のだろう。

「藍妃さま。……………婚儀の、儀式に来られるのは、どなたが？」

「こちらまで入られるのは、神官、四方家の方々、それに王家から、どなたか」

「それでしたら、わたくしに後見がないことは、どなたもご承知のほうでございます」

「だからといって、寝間だけのこんなところにお通しすることはなりませんよ、水華姫」

「もちろん、わたくしは都の習慣を存じません。ですが、今から詠えるのではどちらにしろ時間がかかり過ぎます。都の姫君なら、なにもかも詠えてお興入れなさるのでしょければ」

「ええ、月のお道具はもう作らせはじめていますよ」

「ですから、わたくしには、……………藍妃さまがお若い頃使われていて今使っておられないお道具がありましたら、使わせて頂けませんでしょうか？」

「わたくしのを？」

「はい。……………もちろん、もし、藍妃さまがお認めくださるのであれば、ですが」

白藤の言葉に、ようやく意図が見えて、藍妃はぱちんと扇を打った。娘時代の自分には持ち得なかった視点だが、確かにそれは効果的に違いなかった。

「見る方が見れば、それが私のものだったことは分かるはず——時間もかからないし、確かに質は悪くはないわね。……………そうね、柏」

「はい、お方さま」

「波速と一緒に倉に行って、使えそうな私の興入れ道具を片っ端から出させてちょうだい。この隣の部屋を、この人の居間として整えます。それならお休みの邪魔にはならないでしょう」

「はい、畏まりました」

「ありがとうございます、藍妃さま」

丁寧に頭を下げた、息子が連れてきた水の姫巫女に、彼女は感心したような眼差しを向けた。

「月には決して思いつかないでしょうね？」

「元々身分ある姫君には必要ございません」

苦笑して、彼女はゆっくりと、言葉を続けた。

「ですが、わたくしは都での身分はないも同然、東雲さま、藍妃さま、天藍さまのご意向一つでどうとでもなる身でございます」

「そうでもありませんよ。あなたが、聖なる水の巫女であることは、四方家はもちろんすべての貴族、神官の知るところとなりました。こうなった以上、私たちにはあなたを水の妃として奉るしかない、というわけです。ほとんどの貴族は、神殿に人を入れていきますからね」

「……………それは……………良かったのでしょうか、悪かったのでしょうか？」

困惑したように、枕の上から見上げた藍色の瞳に、藍妃は笑う。

「こうなっては良かったのですよ。私が王女ですから、東雲は王女を妻にできない。ほかの三家には入っても」

「……………」

「ほかの三家からしか妃に入れられなかったところに、あなたが入ったわけです。あなたは都の粹組みからは外れていますが、水の姫として比類ない価値を示したことになります」

「希少価値、ということになるのでしょうか？」

「少なくとも、神殿がそう考えていることは間違いないようですね。私はあなたの後見として動くよう、夫から依頼されましたから、あなたの持ち物を揃えることにしたのです。部屋の件は片付いたとして……………お衣裳のお好みは？」

「お任せいたします、藍妃さま。わたくしは都の作法は存じません。動けない分、講義などしてくださる方がいらっしやれば、聞くことはできませんが……………」

「お持ちの、たくさんの色糸は何に使うおつもりでしたの？」

「あれは、刺繍絵のために持って参りました。下地まで作ったものがありましたので、もしかなえぼと思ひまして」

「刺繍がお得意？」

「わたくしがはじめに着ていた衣裳を覚えていらっしゃいますか？」

どこまでも淡々とした口調で問われて、藍妃は少し考えてから頷いた。

「ええ、見せてもらいました。白地に白糸だというのに、緻密で計算された美しい手でした。あれは、もしかしてあなたが？」

「はい。刺繍は幼い頃から」

「それは結構なことだわ。あれだけの手なら、言うことはありません。楽器は、二弦琴が入っていましたね？」

「はい。三弦までなら弾いたことがあります」

「分かりました。教養は思ったより心配がありませんね。文箱なども入っていたし……………あとは宝飾品と、とにかくお衣裳を揃えさせましょう」

「宝飾については知識がございません。ご迷惑でなければ、藍妃さまにお任せいたします」

「分かりました。縫い取りの部分だけあなたに回しましょうか。……………あなたの荷物から、裁縫箱をこちらへ持たせましょう。それと、裁縫箱と、何よりもまず夜着以外の衣裳も整えて」

「藍妃さま、その前に、都の衣裳のことについて、詳しく学ぶことはできませんでしょうか？しきたりや、都の姫君なら必ずご存知のことを、わたくしは存じません」

「ああ、そうでしたね……………ではあとで、教師になるようなものをよこします。それと安楽椅子を運ばせます。作業をするのに寝台のままでは不都合ですからね。神官どのが許可を出したら椅子に移れるようにしたほうがよろしいでしょうね」

「はい、藍妃さま」

「ではそうしましょう。……………わたくしは一度戻ります。桂」

「はい」

控えていた女官が一步進みでて、ひざまずく。

「しばらく、おまえは水の姫のところになさい。私の代わりに教えることもできるでしょう」

「承りました」

「ではわたくしは宝飾と染めの指示をして、東雲にも言わないとならないわ。桂、後を頼みますよ」

「かしこまりました」

「ありがとうございました、藍妃さま。よろしく願ひいたします」

片腕を支えに起き上がり、こぼれる髪を払って見送ろうとした彼女を、藍妃は自ら寝台に横たえた。

「あなたは無理をせず、はやくお元気になることを考えて。見送りは元気になってからで結構ですよ」

ゆつたりと笑ってみせ、藍妃は部屋を出て行った。

女官と侍女が慌てて従い、気配が完全に遠ざかるまで見送っていた桂と呼ばれた女官が、戻ってきて、水の姫を見やった。

「桂とおよびください、水の姫さま。お見事でございました」

「何がでしょう？」

「藍妃さまはあのご気質、なかなかお気に召すのは難しいことでございます」

「お気に召したでしょうか？」

「姫さまは、大切なところを、藍妃さまのご支援が必要だとおっしゃいました。藍妃さまはご満足なされたと思います」

「わたくしは、必要なところをお願いしたに過ぎません」

白藤は、ふしぎそうに微笑んでみせ、それから、寝台に沈み込むように身体の力を抜いた。

「水の姫さま？ご気分が優れませんか？神官さまをお呼びしましょうか」

「いえ、大丈夫です。藍妃さまにお目にかかって、緊張してしまっただけですから」

ふわりと笑ってみせると、桂は微笑んだ。

「では、しばらくお休みくださいませ。神官さまがおいでになるまで、姫さまのお邪魔はいたしませんから」

「……………すみません、ありがとう」

眩くように白藤が答えると、藍妃の侍女は微笑んで、上げたままだった紗幕を下ろした。

縫い取り

ゆったりとした椅子にもたれるようにして、白藤は大判の本をめくる桂の話を聞いていた。

「ですから、この内着だけでいらっしゃるときは、内から出てはなりません。もちろん、殿方にお通り頂くことも、なりません」

「今のこれが、内着ですね。色は関係がないのでしょうか？」

「はい。先ほど説明いたしました、この東の家では、他の家の色は纏わないことになっております」

「王家の黄、中央神殿の紫、そして北家の黒、南の赤、西の翠、そしてこの東は青、でしたね」

「はい。よく覚えて頂きましたね。もちろん内着に重ねたり裏地に使ったり、柄に使ったりはある程度認められるようになっていますが、一番濃い色は染め方が決まっていますが、それは四方家のみ許されています。聖域ではそのようなことはなかったのでしょうか？」

「水の里では、純白は長と姫のみに許される色でした」

「そうですか。確かにお持ちになった、あの白は美しい、雪のような色でしたね」

「白は特別な色です。水に通じますから。特別な精製をするのです」

「そうでしたか。……………こちらでは、そういった精製の技術より、染めのほうが際立っていますね。柄染めや縞、格子などもよく見かけます。もちろん縫い取りもございます。内着の上に重ねる表着は、少し丈を長めに、女性は足元、手首まで覆います。今は少したっぷりしたものが主流です」

「藍妃さまは、随分綺麗な金色の縫い取りのある、濃い青のものをたくさんひだを寄せて、お召しになっておられましたね」

そう言うと、桂は満足そうに頷いた。

「よく見ておいでですね。その通りです。藍妃さまはもとは王女さま、いまの王陛下の妹君でいらっしゃいますので、金も黄もお使いになれます。四方家は王家から順番に王女さまを頂いておりますので、ある程度は黄色、金色を使うことを許されています。内着は見えなくなるものなので、何色を使ってもよろしいのですよ」

「……………白でも？」

いたずらっぽく訊ねると、桂はにっこりと微笑んだ。

「もちろん、白でも。——とは申しましても、都ではどうしても、染めなしの色になってしまいますね。お里から取り寄せられればよろしいのですが」

「そこまでは、我が儘は申せません。……………この、釦で留めたり、飾り紐で留めたりするので

「はい。それは皆様お好みや、お年で決まって参ります。月待の姫さまは、飾りの少ない金の釦で留めるのがお好みですが、嫁がれたあとはどうなさるか」

「まあ。もう嫁ぎ先がお決まりなのですか？」

「ええ。西の若君に。東雲さまとは一年違いのお生まれです。兄君のお体が弱く、正式に跡継ぎ

となられたのが遅かったので、幼い頃はよくこちらに遊び相手としてお招きしていました。当然、月の姫さま………当時はまだ暁の姫とお呼びしていましたが、姫さまも親しくお遊びでした。兄君が神殿に入られ、夕凧の君と名前を改められて西の嫡子となられましたので、お親しいこともあって、月の姫の嫁ぎ先にと藍妃さまが」

「こちらでは、お名前が変わるのですね」

「まず、お立場で変わります。魂名と呼ばれる名前は、産まれたときに授けられ、死ぬまで変わりませんが、神官さま以外では親が知っているほかは夫婦、とても縁の強い方にお教えするだけで、みだりに口にするものではないとされております。姫さまも、里を出られるときに、水華、というお名前を若君がつけられたと伺っておりますが、その前のお名前はこちらでは魂名と同じ扱いになりますので、みだりに現さないでくださいませ」

「分かりました。………すみません、かなり脱線してしまいましたね。お衣装のお話でしたのに」

「いいえ、お名前のことは大切なことですから、きちんとお教えできてよろしゅうございました。………表着も中着も、特に柄の決まりはございません。品のあるものでしたら結構ですし、おくつろぎの場合には少し崩してもよろしゅうございます。もちろん未婚の姫君が外でなさる服装ではございませんが、居室では、今のように、重ねて襟元に留めるくらいでも表着として通用いたします」

「分かりました。あとは宝飾は？」

「実際にご覧になりながらのほうがよろしいでしょう。それより姫さま、藍妃さまより、この講義が姫さまにご理解頂けましたら、表着の裾になる部分に、花の模様を縫い取りして頂くよう、布をお預かりしております」

「まあ。どのような？」

答える代わりに、本を入れて持たせてきた入れ物を開き、三枚の布を取り出した。一枚は鮮やかな藍色、藤色、もう一枚は暖かみのある曙色で、白藤は首を傾げた。

「こちらは………あら、きれいなお色」

「これは、月姫さまのためのものです。縫い取りが済んでいますので、どのように模様を入れたらいいかの参考になるのではとお持ちいたしました」

「ええ、とても参考になります。………まあ、華やかな薔薇の花。姫に似合いそうですわ」

「縫い取って頂くのは、ご自分のお衣装のものです。花を、と藍妃さまはおっしゃいましたが、何の花になさいますか？」

「たとえば、どのような花が相応しいでしょう？」

「どんなものでもよろしいのです。牡丹や薔薇や、雛菊まで。桜や桃、それに藤の花もよろしゅうございますね」

「では、そちらの深い藍色には藤の花を。藤色には………野の花を。堇を何色か、それに雛菊、撫子などは？………蓮も素敵ですけれど」

「まあ、それはよろしいですわね。蓮は何色の地がお好みでしょう？」

「そうですわね。………うつくしい、春の空のような色はございます？」

「ありますとも。持たせましょう。縫い取り用の糸は、お持ちになった他に、必要な色を揃えましょう」

「持ってきたものは量が少ないので、刺繍絵用にとっておきたいのです。青、緑、紫、薄紅、黄を濃淡何色ずつかお願いできますか。それと白」

「かしこまりました。すぐに持たせましょう。……………すぐに取りかかれますか？」

「すこしだけ縫い取って、藍妃さまに見て頂いた方がいいと思うのですけれど」

「かしこまりました」

桂は微笑む。

「では、すぐに手配を。その間に神官さまに来て頂きましょう。……………ただし、お休みをとられてから取りかかってくださいませ」

「はい」

白藤は微笑み、桂はそのまま出て行った。

藍妃の意見で方針を変更し、淡い空色に藤の花を丁寧に、けれどかなりの早さで縫い取っていた白藤は、来客に気付かなかった。

「姫さま、水華姫さま」

呼びかけに気付いて手を止めた白藤は、入り口にいる東雲と、困った顔の桂、そして波速の順に目をやった。

「ごめんなさい、これに気をとられていて」

「若君さまが、姫さまが起きられているのなら少し話したいと仰って……………」

白藤は首を傾げたが、すぐに思い出した。

この格好は、くつろぎ着で、男性と面会するのに相応しい服装ではない。

が、彼はこの家の嫡子であり、自分は彼の妻になることが決まっている身だし、身分から言っ、文句を言える立場にはない。

こうしているのは、天藍と藍妃の意向があるから、というそれだけの理由だ。

「……………表着をもう一枚重ねたら構わないのではないかしら？おいでいただいたのに締め出すのはあまりにも失礼だし、桂や波速もいるのだから」

「姫さまがそうおっしゃるなら」

桂が折れ、波速が急いで持ってきた表着を、藍妃が入れさせた衝立を置いて、柔らかな合わせの上に重ねる。たつぷりとひだがとられた表着は、細い彼女の身体をすっぽりと包み込んでしまう。

ようやく通された東雲は、苦笑して、白藤の手元を見た。

「せっかく起きられるようになったというのに、そんなに根を詰めては、また寝込んでしまう」

「まあ。単なる縫い取りですもの」

白藤が笑うと、彼女の手元の空色の布に藤の花が縫い取られているのを見て取って、目で伺った。

「水華？この花は？」

「桂が提案してくれたのです」

何故聞かれたのか分かっている彼女はくすくすと笑い、でも、と続けた。

「花、という藍妃さまのご指定がありましたから」

「なるほど。こっちの藍色と、あの藤色は？」

「藍色には、薄紅の蓮を、藤色には野の花を縫い取ろうと思っております。いかがでしょう？」

「よく似合いそうだね。……………そう、瑠璃の額飾りを探してきたんだよ、水華」

「額飾り？」

彼は表着の隠しから練絹の袋を取り出し、白銀の鎖に水晶と瑠璃玉のついた飾りを取り出した

。「あなたの里の神宝を見てね、瑠璃玉がとても似合うと思ったから、探させた」

「これを、わたくしに？」

驚いたように目を見張った白藤は、思わずまっすぐに東雲の瞳を見上げた。

「そう、あなたに。……………波速。この額飾りをこの人につけてみてくれ」

「綺麗ですこと、さ、姫さま」

しゃらり、と鎖が揺れ、長い黒髪に白銀が映える。

白い額に、瑠璃色の玉が揺れて、波速はほう、とため息をついた。

「お似合いです、姫さま」

「ほんとうに。良いものを見つけられましたね、若君」

「本当に、この人のためにあるような玉だと思った。似合って良かった」

戸惑っている彼女に、東雲は柔らかく微笑む。

「こういった飾りは着けなれていないと思うけれど、贈り物くらいさせてくれてもいいだろうね？」

「……………はい。ありがとう、ございます」

少し声が詰まり、白藤は、目を伏せた。

神宝に似ている、という、彼の言葉に、心を揺らされた。神宝に寄せる、巫女の想いを見透かされたようで、怖い、とってしまった。

「水華、せっかく、あなたの瞳の色にも合う瑠璃なのに、目を伏せてはもったいない」

「いつも凜としておられる姫さまが、珍しいこと」

波速がくすくすと笑う。

東雲がことさらに大切に扱っているのが、巫女というより一人の少女としての「水華姫」しか見えない波速は、積極的な東雲に対して乙女らしい恥じらいと遠慮が入り交じっているようにも見えるのだろう。

「本当にお似合いですよ。その、藍の正装をなさったら素晴らしいでしょうね」

「これに蓮を入れるなら、薄めの紅玉の首飾りと帯飾りもあった方がいいだろうね。少し探させてみよう」

「そんな、東雲さま。わたくしのためにそんなことは……………」

「気にしなくていいんだよ、水華。私がそうしたいんだからね」

東雲は優しい口調でそう言って、手元の縫い取りを見る。

「これはもう少し？」

急に話題を変えられて、一瞬戸惑ったが、彼女は頷いた。

「はい。あと、この花びらと、蔓を這わせたら.....」

「それなら、邪魔にならないうちに戻るよ。でも、くれぐれも無理はしないように」

「そのことなら、皆様に気を遣って頂いていますから、大丈夫です」

「また、遊びにくるよ。構わない？」

「はい。お待ちしております」

座ったままの白藤は針を落とさないように立ち上がらなかったが、東雲は特に気にした様子もなく立ち去った。

桂が見送り、それから恭しく額飾りをとる。

「しまっておきましょうか、それとも出しておきましょうか？」

「どう扱ったらいいのかわからないの.....」

戸惑った、不安げな声音に、桂は微笑みを浮かべた。

「でしたら、箱に入れておきましょう」

「ありがとう。.....わたくしは、この花を仕上げてしまいますね」

「あまり無理なさいませんように」

東雲と同じことを言った女官に小さく微笑み、白藤は針を持ち直した。

花を一ふさ縫い取り終わり、蔓草にかかる細かい白い煌めきを刺しているところに、様子を見に来た桂は、驚いて思わず息を飲んだ。

それほど時間がかかっているわけではない。布に糸の色を合わせて構図を決め、それから一刻半ほどで、間には東雲の訪問を挟んだというのに、美しい花房と、細かい深緑の葉、光に映える蔓の陰影までが細かい色使いで美しく生き生きと描かれている。

丁寧に針を使っている美しい姫は真剣な表情ではあるが、どこか楽しそうでもあって、無理をしているわけではないことは見れば分かる。

最後の糸を刺し終え、糸の始末を手早く終えて顔を上げた白藤は、すぐ横で桂が見つめているのに気付いて首を傾げた。

「.....桂？なにか良くないところでもありましたか？」

表に返して自分の縫い取りを確かめはじめた姫に、桂はため息をついて止める。

「いいえ、とんでもございません。あまりにも見事なお手で、驚いてしまっただけです」

「花の縫い取りは慣れているだけです。藍妃さまにもそう思って頂けるとよろしいのだけれど」

白藤はにっこりと微笑み、桂に空色の生地を渡した。

「この藤色に取りかかりますね」

「姫さま、急に無理はおやめください。今日やっところらの椅子に映ることができたばかりだというのに」

「…………では、日暮れまでに、構図と糸だけ決めてしまうのでは？」

「それなら、まあ、かまいませんでしょう」

桂は苦笑し、波速と目を見合わせた。

母と娘。

藍妃は、東雲の連れてきた「村娘」に、厳しい視線を注いでいたが、評価を「姫」に格上げすることになりそうなことに、何となく負けたような気分になっていた。

王女として生まれ、東の嫡子に嫁ぎ、藍妃の名で呼ばれるようになり、ほとんどすべてのことが自分の予想通り、考え通りだった彼女にとっては、あまり面白いことでもない。

聖域、神域と呼ばれてはいても、古代ではない。ただの村娘に熱中する息子を苦々しい思いで見ているが、珍しいのならそばにおいて側女にでもすればいい。

彼女は心の底からそう思っていたというのに、夫の天藍は正式な迎えをするし、迎えた娘は予想を裏切るし、面白くないこと甚だしかった。

だが、話はどんどん進んでいるし、こうなっては彼女の立場上、動かないわけにはいかない。

不満な思いのまま、私室の奥にひとりで座っていると、払ったはずの侍女がやってきた。

「なにごとです」

「申し訳ございません、藍妃さま。月待の姫さまが、おいででいらっしゃいますが、どういたしましょう？」

「月が？珍しいこともあるものね。どうもこうもない、通しなさい」

侍女の取り次ぎを経て現れた娘は、艶やかな黒褐色の髪を結び上げ、同じ色の瞳を煌めかせている。珊瑚の飾りは、おそらく西の夕凧からの贈り物だろう。

「お母様、ご気鬱でいらっしゃると聞いたので参りましたのよ」

「あなたがこちらに来るなど、珍しいことね」

「だって、ご気鬱の原因など決まっていますもの」

月待の姫は、くすくすと笑った。

母親と同じく、高貴な姫として生まれ、勝ち気な気質な彼女は、頭もよく、推察することに長けている。が、問題の娘に関しては、母と正反対の立場をとっていた。

「水華お姉様のことでしょう？」

「あなたは、母の気分を読むのが得意ですからね」

ため息まじりに言うと、遠慮なく座った娘はくすくすと笑った。

「巫女姫さまとはいえ、村娘。お兄様がお連れになる前、そう、わたくしにもおっしゃっていたのに、水華お姉様は、なにもかも完璧なんですもの。お美しさには瑕疵などどこにもないし、教養も驚くほど、縫い取りは桂が見ていなければ到底お姉様のお手とは思えないほどの出来だと聞きましたわ」

「ええ、今裏地をつけて仕立てさせていますけれどね……職人でもああは参りませんよ。しかも手の早いこと」

「神官さまとも、お話されていて、感嘆させているとか。しかも調度品はお母様のものを望まれて、宝飾はお兄様が求めてくるものを、すべて波速や桂に説明させて、そのうえでお母様に見て頂いているんでしょう？」

「よく知っていることね」

皮肉の滲んだ声に、娘は全く怯まなかった。

「楓はわたくしの侍女ですもの」

すまして言った娘に、藍妃はため息をついた。

「都の衣裳などは知らなかったようだけれど、一度の講義で覚えてしまうし、立ち居振る舞いも、そうね」

「それはわたくしも、初めてお会いしたときに思いましたわ。ちょっと独特ですけど、舞うようにゆったり動かれるのが美しく、気品があって」

「確かに優雅です。それは認めなくてはなりません」

「その上にあのお美しさ。その辺の姫など、あっさり霞みますわ」

若さから来るのか、遠慮なくそう言った姫は、にこりと笑った。

「さすがのお母様も、認めざるを得ない、というわけですね」

娘の言葉に、藍妃は苦笑する。

「ええ。お父様は元々、水の巫女なら良いと仰せでしたけれどね。まさかあれほど高い素養があるとはまったく想像しておりませんでしたからね」

「しかも、ものすごく気を遣ってくださってますわ」

「褒めなくても分かっています。何につけても、すべて私の意向に背かないか、つねに気にしていると桂が言っていましたよ。波速も、美しく優雅な姫だと絶賛しています」

「楓もすっかり心酔していますわ」

「問題があるとすれば、都の慣習についての知識不足と、宝飾に興味になさすぎることだけ。しかも、慣習については一度教えればすべて覚えてしまうのですからね」

藍妃はため息をつく。

「そういえば、お母様。これから、合奏をして欲しいとお兄様に頼まれていますのよ。水華お姉様の二弦琴を聞きたいのですって」

面白そうにそう言った姫は、母親の顔を窺う。

「どうなさいます？お母様」

「東雲には好きなようにやらせるしかありません。それに、やりたいことを私の言葉でやめるような姫でしたら苦勞はしませんよ」

くすくす笑った月姫は、しゅっと衣擦れの音を立てて立ち上がった。

「報告には参りますわ、お母様。お母様が聞いていらっしゃるかどうか、知りたかったのですが、まだですね」

「私も手一杯ですからね」

儀式を数日後に控え、部屋の装飾の手配、着物の手配、饗宴や招待の手配など、すべて藍妃に委ねられている。

「お母様を後見役になさった水華お姉様の聡明さには、本当に驚くばかりですわ」

「東雲が驚いていましたよ。何も一番厳しい人を後見にしなくても」

「まあ、お兄様ときたら、水華お姉様がどんなに賢い方が、まだ分かっていらっしゃいませんのね」

「そこが、あの姫の真に聡明なところですよ。殿方の前で賢しら口を聞く娘はよくありませんよ、月姫」

「あら。夕凧の君のことをおっしゃってるのなら、手遅れですもの。最初はお兄様の遊び相手でしたのよ？いまさら遠慮しても、何か企んでいるようにしか見えませんわ」

最初は、格下の相手だったため、遠慮もなにもあったものではなかった。

そして、気を遣わなくていいようにと娘の嫁ぎ先に決めたのは藍妃自身だ。

「確かにそうですけれどね、姫。年頃の慎みというものは身につけなければなりません」

「では、水華お姉様はいいお手本ですわ、お母様。お姉様の慎み深さときたら、都の慣習を知れば知るほど深くなっていくので、お兄様が嘆いていらっしやいましたもの」

「嘆いて？」

「ええ。都に参るときには一つ車でいらしたのに、衣裳の慣習を知ってからは、どんな時でも都の衣裳の表着まできちんと着けた格好でなければお会いにならないし、最近では必ず上座にお兄様を座らせて、波速と桂を置いて、まず最初に丁寧にご挨拶なされるんですって。教えた桂が苦笑してるそうですわよ」

「……………徹底していること」

ため息まじりに呟いた母に、姫は笑った。

「そろそろ行かなければ。月は、水華お姉様の礼儀をしっかり見て参りますわ。お母様のおっしゃる、慎みというものが学べると思います」

「月は、皮肉の強いことね。……………あとで茶菓子を運ばせます」

「ありがとう、お母様」

月待の姫は、にっこり笑って退出した。

室礼

水華のために設えられたのは、狭い水の庭に面した寝室と、隣接する居室だった。

居室の壁は一度取り払い、水の庭に面した露台を設け、寝室との間には扉を設けて廊下に出ずに行き来できるようになった。壁は藍色の垂れ幕と金の装飾が施され、儀式の日に向けての室礼が整えられている。

彼女が神殿に出かけていた昨日一日を使って突貫工事が行われたのだが、とてもそうは見えない。が、余計なことを聞くよりも、確かめる必要のあることの方が多かった。

鮮やかな絵の屏風、露台に面した紗幕とを見やり、白藤は軽く首を傾げた。

波速と桂を見て、訊ねる。

「こちらには、どのような方がいらっしゃるのかしら？」

「婚儀の次第は、覚えておられますでしょうか？」

桂の質問に、白藤は頷いた。

「東の正殿で、まず王家、四方家、それから主立った貴族の方をお招きしてお披露目の儀式と祝宴、それから、東雲さまの内殿で、この東家の皆様をお招きしてご挨拶、そのあとお清めして結婚の儀式」

「はい、その通りです。儀式のあと、姫さまの寝室に東雲さまがいらっしゃいます。おわかりですね？」

「そう聞いていますわ。わたくしは清めたお衣装でお待ちするのですでしたね」

「はい。そして朝、婚儀の最後の儀式、朝餐の儀式がございます。それが、こちらの間を使う儀式です。婚儀が無事行われ、姫さまがお妃さまになられたことをご報告なさる儀式です。具体的には、天藍さま、藍妃さま、月待の姫さま、お三方の四方妃さま、四方妃さまの、十五歳以上の御子さまが参加なさいます」

「西のお方の姫君はお二方ともお輿入れなさっていますので、最初の祝宴にはいらっしゃいますが、最後の祝宴にはいらっしゃいません。南のお方の姫君がお一方、北のお方の若君がお二方、姫君がお一方いらっしゃいます」

「まあ、東雲さまのご兄弟がそんなにいらっしゃるなんて。月姫にしかご挨拶していませんのに」

「姫さまがお気にかかる必要はございません。藍妃さまは王女さまでいらっしゃいますので、一段格上でいらっしゃいますから」

「東雲の若君さまも月待の姫さまも、他のお方さまの御子さまがたとは疎遠でいらっしゃいます。姫さまは、ご紹介されたらご挨拶なさる程度に」

「分かりました」

白藤は頷いた。

水の里では、複数の妻を持つことはない。里長の妻に子がまったくできない場合に、内妻を置くことはあると読んだが、それはあくまでも緊急用だった。それが、制度として三人もしくは四人の正妻を置き、そして、正式な儀式を経ない妾妃も複数いると聞いている。東雲には妾妃はいないそうだが、いつできてもおかしくはない。もちろん、そこに文句をいうつもりは無かったが。

「婚儀に参列のために、水の里より柏の伯父と神官が、今日にも参るはずなのですが」

「伯父上さま、神官さまには、すべての儀式に列席して頂けます」

「藍妃さまは、そのことになにかおっしゃっていませんか？」

「それは何も。そちらは、天藍さまが手配なさるでしょうから、姫さまはお気になさいますな」

「では、わたくしは何をすればよろしいのでしょうか？」

この問いかけを待っていたのか、桂がにっこり笑った。

「お妃さまとして、最初のお勤めとなります。どのような形に皆様に席に付いて頂くか、どのような装飾をなさるか、どのようにもなされるか、東の嫡子のお妃として、どういったお方であるのか、まずは水華姫さまの力量が量られます。もちろん他の家の方はいらっしゃいませんが、四方妃の皆様方のご実家とつながりがあること、お忘れになってはなりません」

桂のことばに、白藤は少し考えた。

「.....主賓は、天藍さまと藍妃さま、と考えてよろしいでしょうか？」

「そうですね。一応は、四方妃さまも」

「分かりました。.....東雲さまは？」

「姫さまのお隣に。ただし、この席では東雲さまは姫さまをおかばいになれません」

「わかっております。……西のお方さまはお一人、南のお方さまは姫君と。北のお方さまは、若君おふたりと姫君おひとり、ですね。……？」

そこまで言ったところで、白藤はいぶかしげに眉を寄せた。

「月姫さま？」

「え？」

「お声が」

一拍置いて、楓が部屋に駆け込んできた。

「ひ、姫さま！お隠れください！」

「隠れる？」

「楓！はしたないことは！」

「それどころではござ……」

「お姉様！いい加減になさい、この馬鹿者！」

「久しぶりに聞きましたねその君の気持ちいい罵倒」

涼やかな若い男の笑い声が聞こえて、あつけにとられた白藤が立ち尽くしたところに、若い男が現れ、月待が珊瑚の櫛を投げつけた。

「……夕風の君……」

呆れたように呟いた桂の横で、波速がはっと気付いたが、時既に遅かった。

「さすがに、あの東雲が攫ってきたというだけのことはありますね。美しい姫君だ」

「無礼です、お下がりなさい！」

月待が駆け込んできて、水華の前に立ちふさがった。

「すぐに出て行きなさいこの無法者！」

「未来の夫に向かってその言い方はあんまりですよ月姫」

月待が言い返そうとしたところに、白藤は事情が飲み込めて、彼女の肩に手を置き、そっと囁いた。

「西の夕風さまですね？姫の許嫁のかたと伺っておりますわ」

「許嫁だろうと幼なじみだろうと、婚儀直前のお姉様を見ようと押し入るのは無礼者以外の何者でもありませんわ」

「四方家なら、どこかの披露目の宴でお目にかかる機会があるものですよ、姫。……ああ、朝餐の儀式の支度ですか。大変でしょう、外から来られたのでは」

「そうですね、あなたときたら、南から去年沙羅姫を娶られたのですわね」

「仕方がないでしょう。彼女は今年十九、あなたは十五」

「元々兄上様に嫁がれる予定が、沙羅姫さまのお気の毒なこと」

「兄上のお体が弱いことは、十歳のころから分かっていたこと、そこで皮肉を言うのはあなたらしくもないですよ、月の姫。こちらでは藍妃さまの権力が絶対ですが、普通は平等、交流もあるものだ。朝餐の儀式はさぞや久しぶりの対面になるのではありませんか？」

「お母様に聞かせて差し上げましょうか、そのお言葉」

許嫁同士の口喧嘩に、息を切らせた楓の後ろから東雲がやってきて、ため息をついた。

「……久しぶりだが、押し入るのは感心しないな、夕風。それと月姫。みっともないから怒鳴るのはやめなさい。それと桂」

「はい、若君」

「水華を座らせて、お茶を運んでくれ。こうなったら追い返すのも面倒だ」

「かしこまりました」

「それと、悪いが母上には内密に」

「……それがよろしゅうございましょうね」

桂がため息まじりに折りたたみの牀机を開いて水華と月待をそれぞれ座らせる。

「西の夕風の若君さま、初めてお目にかかります」

「水の巫女姫、丁寧なご挨拶、ありがとうございます。東雲、月姫とは幼い頃からの付き合いで」

「兄上様がいらっしゃるのですね？」

「ええ。身体が弱くて、当主には私が向いているということになり、十五のときに私が嫡子につき、兄は神殿に入りました。私の母は東妃、天藍さまの異母妹で、そのご縁でこちらに遊び相手として呼ばれておりました。兄は南妃の子で、他に北妃のところに妹がおります」

「まあ。こちらとは随分……」

「母は気位が高いからね。……王の娘は、基本的にすべて中央神殿に入る。次の王の同母妹は、四方家のいずれかに嫁すことになっているけれどね」

「まあ。ということは、都にも巫女さまがいらっしゃいますのね」

「基本的に、人前に出ないで祈り続けることになっている、そうだけどね。水の巫女である君なら会えるかもしれない、というか、昨日会ってきたかと思ったけれど」

「それほど時間がなかったのです。大神官さまとお話をしていたら長引いてしまって……」

「大神官と長話ができるのはあなたくらいですよ、水の姫君。東雲、水妃とお呼びすることにしたそうだね？」

「よく知っているな」

「最初の饗宴の招待は届いているからね。それで、ちょっと興味を持ってね。君たちは藍妃さまのおかげで四方妃のことすらよく知らないのに、水妃どのは都のこともよく知らないのに朝餐の儀式は頭が痛いと思うけれど」

「そうかしら。お姉様はとても聡明な方なのよ」

「月姫、お褒めくださるのは嬉しいですが、ちょうど今頭を悩ませていたところなのです。朝餐というからには、簡単なお食事ではないでしょう？」

「はい。まずお茶と粥、果物のほか、三品をご用意することになっております」

「粥……月姫、嫌いなものはありますか？」

「辛いものは嫌いです。苦いものも」

やれやれ、と夕風が肩を竦めたが、白藤は頷く。

「夕風の若君さま？去年経験された、ということですが、夜の儀式から朝餐まで、出席される皆様はどちらにいらっしゃるのでしょうか？」

率直だが丁寧な問いかけに、夕風は少し笑った。

「頭のいい人だな。……内殿にある清められた一角で、祈りを捧げているはずですよ。もちろん何部屋かを用意しますが」

「それは私の仕事だから、水華が気にすることはない」

「はい、東雲さま」

白藤は控えめに頷いたが、少し考えて、頷いた。

「ありがとうございます。波速、書くものを頂ける？」

「かしこまりました」

波速は文箱を用意し、白藤に渡す。

さらさらと書き記したのは献立で、覗き込んだ月待は目を瞬いた。

「あら、まあ……」

「おかしいでしょうか、姫」

「いえ、おかしくは……って、これは口出ししてはいけないんです。でも、さすが水華お姉様ですわ」

「夕風の西の若君さま、お話、大変参考になりました。ありがとうございます」

「ご丁寧に、恐縮です。……それにしてもお美しい」

讃辞には、白藤は困ったような苦笑で答え、東雲に視線を向けた。東雲は夕風を連れて出て行き、月待がため息をついて、丁寧に頭を下げた。

「本当に、申し訳ございませんでした、お姉様。このこと、お母様には内密にお願いできますか。絶対に怒りますから」

「もちろん、わたくしから藍妃さまに申し上げることは何もございませんわ、姫。……南のお方さまに、姫君がいらっしゃると伺いましたけれど、月姫はご存知ですか？」

「知っているのはもちろん知っていますけれど、言葉を交わしたのは新年の祝いの席くらいです。嫌いではないのだけ

れど……」

「お嫌いではないのですね？」

「それはもちろん。あちらのほうが年上ですから、お姉様に当たる方、でも、だからなおさら近付けたがらないんですわ」

誰が、とは言わなかったが、意図は伝わった。

「ありがとうございます、姫。人の関係ばかりは、わたくしには掴めません」

「桂や波速に言えることでもありませんからね。あのふたりは元々お母様の侍女だから」

「ありがたいとは思っておりますが、東雲さまにも四方家からお輿入れがあるのでしょうから、勉強させて頂きました」

「水華お姉様は、本当にえらいわ」

ため息をついたところに、桂がお茶を淹れて持ってきて、月待はため息まじりに茶杯をとった。

「月姫さまは、夕凧さまのところに、先に南のお方がお輿入れされたのがお気になるのですね？」

「……当たり前だし、仕方の無いことだわ。沙羅姫は夕凧さまとはほとんどお年も変わらないから。南の他の姫君は、みな西のお方の姫君だから、沙羅姫しか西には行けなかったんです」

「……そう言った不都合もあるのですね」

「どうしても姫君が足りない時は、妾妃の姫の中から正妃の養女にして四方妃に出すこともある、と聞きましたけれど、そのくらいなら欠けさせた方がましだと思います。お気の毒ですもの」

同格の四方妃とは見なされない。

そう言いたいのだろう言葉は汲み取って、白藤はゆっくりと部屋を眺めた。

「桂。………ガラスの茶杯はあるかしら？」

「ございます」

打てば響くように答えが返り、白藤は微笑んだ。

「二種類、お茶を出したいの。お席に着かれた時と、お食事のときと。しきたりに反するかしら？」

「いいえ。かしこまりました。ガラスの茶杯でございますね」

「ええ。できれば装飾の綺麗なものを。それと、お食事用は白磁。茶葉は、あとで私が選んでお願いします。それと、粥は時間がかかりますわね？」

「一昼夜あれば十分です」

「先ほど波速に献立を渡したから見てください。それから、水を背後にわたくしは座らせて頂きますから、長机の位置と、お膳の位置、それから牀机と敷物を用意してください。位置はあとで」

「かしこまりました」

「お忙しそうね、お姉様」

「いいえ、姫。ちょうど良かったのです。昨日、手巾に、薔薇の模様を縫い取りましたの。もし良かったら、姫のお手元に置いてくださいませ」

「まあ！お姉様の縫い取りの美しいことは、お母様に聞いて、是非見てみたいと思っております。とても嬉しいですわ」

「桂、波速と、献立に無理が無いか確認をお願いします。わたくしは、隣で月姫とおりますから」

「かしこまりました。………長机と、牀机、ガラスと白磁の器、それにお膳も手配しておきます」

「お願いします」

白藤は軽く頭を下げ、月待を寝室に誘った。

前夜

白藤は、夕刻にようやく着いた柏と、一刻だけ会うことができた。

母の董が泣いていたこと、長の妻の小百合も、こんなことになるなんて、と泣いていたこと。

長の子どもたち、つまりは睡蓮の弟妹が、姉の睡蓮、姉も同然に慕った白藤が、二人とも急にいなくなったことに、半ば癩癩を起こしていたことを、無骨な男が、涙を滲ませながら語ったのが印象に残った。

そして、山のような香草と、花の香油、そして都では手に入りにくい白の糸と布を数反、小百合と董の心尽くしとして持ってきてくれた。これは純粹にありがたくて、白藤は丁寧に反物を箆筒にしまい、たくさんの色糸が掛けられた糸掛けに、白い糸もかけ、紙で覆った。くすんでしまっただけは、白糸の意味が無い。

水の里からの祝いの品は、白藤自身が止めたから持ってこなかったが、何も持たせずにはいられなかったのだろう、と思う。

「姫さま」

「桂」

「柏どのは、お館さま、東雲さまとご一緒に食事をとられることになりましたが」

「それはお任せします」

「姫さま、粥の仕込みと、蒸し菓子の下ごしらえは指示しましたが、お茶は」

「玻璃の器は？」

「それをお持ちいたしました。こちらでございます」

うすい藍色の玻璃には、金彩で繊細な模様が描かれている。

「.....きれいだけれど、人数分、あるかしら？」

「はい。ございます。白磁の茶器も人数分」

「それなら、朝の、最初のお茶のことなのだけれど、ちょうど新鮮な香草を伯父さまが持ってきてくださったから、あれを使いましょう」

「香草ですか」

「ええ。水の巫女姫らしくていいでしょう」

白藤は笑ってみせ、籠から束を数種類、籠をいくつか取り出した。

「これは薄荷、それに蒲公英の葉、これは山薄荷。檸檬の香りがするのよ。こっちの籠は大麦を焙煎したもの、こっちは野薔薇の実を乾かしたもの、それから甘草」

「いい香りがいたしますね」

「ええ。これに、神殿から頂く水を使えば、とても良いお茶になると思います」

「これを混ぜるのですか？」

「加減を見てわたくしが淹れてもいいのだけれど、当日は余裕がない、と、藍妃さまにもあなたにも言われたから、あらかじめ準備の手順を」

「はい。当日はほとんどお動きになれないと思います。ですから、今日までのお手配が大切なのですが.....他のことはともかく、お茶は大丈夫でしょうか？」

「あまり煮てはいけないものと、大丈夫なものがあるから、やり方をどこに言えばいいかしら？少し冷ました方がいいと思うし」

「姫さまが厨房にお出入りなさるものではございませんが.....」

「でも、お湯を使えないとお茶が入られないでしょう？」

「そうですね。.....二つおいた部屋に、煎じ薬のための火を使える場所がありますから、そこに火と水の用意をさせましょう。お道具は何が必要ですか？」

「薬缶と、それから蒸留のための道具があれば都合がいいのですけれど」

「厨房に問い合わせてみましょう。.....ところで、姫さまのお食事はどうなさいますか。こちらにお運びしますか、それとも」

「あまり食欲はないの」

苦笑した白藤は、ため息をついた。

「なにか、果物でも頂ければ」

「なりません。なにか栄養のあるものを持たせましょう。ついでに厨房に、蒸留のこと、確認しておきますので」

「ありがとう、お願いします」

柔らかな口調でそう言って、白藤は微笑んだ。

一礼して出て行った桂を見送り、ほとんど支度の整った部屋を見渡す。

立派な椅子が二脚、金の房飾りのついた垂れ幕の前に置かれ、机はコの字形に置かれ、まわりに四脚ずつ床机を置いた。背もたれがある立派なものは正面の二つだけだが、それ以外も装飾の施された美しいものだ。

机には銀で縁取った布をかけ、その上に膳を置いている。はじめに置かれるのは、さっき手配し直したばかりの玻璃の器。

水を背後にした簡素な席は自分のもので、天藍に正対する位置には東雲の座を設えてある。

準備は、もう、整っている。

儀式は、明日の正午からはじまる。

そして、明日、自分は巫女ではなくなる。都の貴族が何と考えていようと、神殿がどう考えていようと、それだけは、白藤自身が肌で感じていることだった。

そうなれば、自分はもう、「白藤」を名乗れない。

分かっていたのに、そのことが、心に迫ってくる。もう、どうしようもないのに、逃げたくなる。

「自分で、決めたことよ、白藤。しっかりしなさい」

小さく、けれど強く自分に呟いて、それが自分を白藤と呼ぶ最後だろうと覚悟して。

彼女は唇をかみ、目を閉じた。

「桂どの」

「.....砥草どの。どうなさいましたか？」

東雲付きの従者に声をかけられて、蒸留道具を持たせた下女を従えていた桂は、先に行くように促した。

「若君が、姫君のご様子をお気にかけていらっしゃいましてな」

「少し食欲がおありにならないご様子ですが、それよりも朝食の準備に余念のないご様子です。心配なさることは、何もございません」

切り口上になったのは、致し方ないことだった。男の方は暇かもしれないが、今、姫とそのまわりは心も含めて準備が忙しいのだ。

「なにかお言伝がありましたら承りますが」

「いや.....申し訳ない。お忙しいのですな」

「ええ、申し訳ないのですが、忙しいのです。ですから若君さまには、特に何も問題はないとお伝えくださいますか」

「分かりました。お邪魔して申し訳ない」

軽く一礼した彼に会釈を返して、桂は急いで下女たちを追った。

用意した部屋には、波速が姫から預かった材料を並べていて、蒸留器具はきちんと組み上がっている。

「姫さまは？波速」

「あなたが戻られたらお迎えに行く伝えてありますけれど」

「ありがとう。.....手順は分かりましたか？」

「ええ。姫さまが丁寧に説明してくださったから。確かに、このやり方なら香草の香りが高く残るでしょうね。手間と時間はかかるけれど、儀式にはちょうどいいと思うわ」

「分かりました。姫さまをお呼びしてきます」

「はい」

桂は、青銅の火鉢の加減を見ながら、湯が沸いていくのを見守る。

起き上がれるようになって半月ほどだが、その間の「水華姫」の働きは目覚ましいものだった。横になっていなければならなかった間に覚えたことは、ほぼすべて完璧に実践してみせたし、そのことは、彼女に否定的だった藍妃でさえ

認めないわけにはいかなかった。

まわりに置かれている侍女たちの目も、どんどん変わっていくのに、
姫ひとりだけが変わらず、水の里の衣裳のように白いまま、そこに在るような気が、時々するのだ。
さらさらと流れる水の音のように、変わらないまま。

「桂、待たせてごめんなさい」

漠然とした桂の思考は、当の姫の澄んだ声に遮られた。

「お運び頂きまして申し訳ございません、姫さま。こちらは姫さまをお通しするようなお部屋ではございませんので、剥き出しのままで失礼いたします」

桂の言う通り、火鉢があるほか、白木の壁も簡単な敷物を敷いただけの床も、私室の豪華さとは比べるべくもないが、白藤は小さく笑った。

「まあ。わたくしは都の姫君ではありません。このお部屋も、きれいに整えられたお部屋ですから気にはなりません。………わたくしが試しに淹れてみますから、そのあと、どう準備するか相談いたしましょう。沸騰した湯をわけて、こちらは火から下ろして、蒸留器の最後に。こちらには、最初に砕いた薔薇の実と、甘草、それに大麦を入れておきます。二種類の薄荷と、薔薇の花びらの半分は、こちらの籠にのせて、蒸気をあてます。この籠をとおした蒸気を、こちらの器に移したら、薄荷の香気が十分に含まれたお茶ができます」

「良い香りになりますね」

説明しながら手際よく準備を整えていく白藤の手元を桂は注視し、ほんのりと漂いはじめた香気に波速は感嘆した。

「ええ。水の里では、新鮮なものを使うのですが、こうすれば乾かしたのものでも十分良い香りになりますね」

「姫さま。残りの、蒲公英の葉と薔薇の花びらはどうなさるのですか？」

「あとで、硝子の茶器に移すときに一緒に入れます。そのときに、もと入れていたものは漉して、花びらと葉だけを入れて。そうすると見た目もきれいでしょ」

「そうでございますね」

「十分さめるから、少しぬるくらいで皆様のお口に入るように」

「冷たくは、なさらないのですか？」

「ええ。………神殿から頂く水も添えましょうか。冷たいものがお望みの方のために」

「そうでございますね。清めのお水のぶんも器を用意いたしましょう」

「直前にごめんなさい。………仕上げではないけれど、味見をしてみてくださいな」

白藤は自ら器から茶器に漉し淹れ、ふたりに渡した。

「頂きます」

押し頂いたふたりが、思わぬ香気に目をみはる。

「まあ………ほんのり、甘酸っぱいの、落ち着いていて………」

「前にご用意なされたものより、こちらのほうがよろしゅうございますね、姫さま」

思わずため息をついた桂と波速に、白藤は微笑んだ。

「良かった。では、段取りを考えましょう」

「姫さま、その前に、お食事を召し上がられませ。明日は儀式、気の休まる間もございませんでしょう」

「そうでございます。もしお倒れになりでもしたら、東雲の若君さまがどれほどご心配になることか」

「………そうですね。これ以上、ご迷惑をかけるわけにはいきませんわね」

白藤は苦笑して、ため息をつく。

「では、軽いものを頂きますから」

彼女の言葉に、二人はほっとしたように顔を見合わせた。

「では、厨房に言いつけて参ります」

「姫さま、お部屋にお戻りくださいませ。こちらのお茶についてはあとで………」

「時間が惜しいし、あなたがたも食べないと保たないでしょう。今夜は同席してください。今夜のうちに確認しておかなければならないことが多すぎます」

「では、陪席させていただきます。波速、そのように膳を」

「はい」

桂はため息まじりに頷いて、厨房に行く同僚に指示した。

王家の血を濃く継ぐこともあって、披露の儀式と宴は盛大だった。

神殿からは大神官が、王家からは神殿に入ることが決まっている東妃の王子と妃たちが、そして他の四方家からは当主とその正妃たち、十五歳以上の正妃の子どもたちがそれぞれ十人ずつほど正装して列席した。

招待の栄誉を受けた主だった貴族たちは礼を尽くした贈り物とともに当主が列席し、居並ぶ様子は王家の季節ごとの儀式に劣らないほど盛大だった。

饗宴の酒と料理は十分に振る舞われ、普段はあまり表に出ない藍妃が出ていることもあって、華やかさが増している。

杯を掲げ、宴の始めに天藍が張りのある声で、笑みを含んで宣言した。

「本日、わが嫡子東雲が、水の姫巫女を娶り、水妃となす。その披露目のためにお集り頂いたこと、感謝する。大神官どの」

こちらも滅多に外に出てこない大神官が、紫に金の装飾を施した正装で、帳の奥に座っていた姫の手をとり、立ち上がらせた。

「こちらは、貴い水の姫」

老いてはいるが、力強い声音が響き渡る。

「清き水の聖域より、東雲の君の招きに応じた巫女姫なり。今宵婚儀をなした後、東雲の君の正妃の席を埋め、水妃と呼ばれることを許された。都は、水の恵みを得てなお栄えることを、神殿は祈るものなり」

ゆっくりとした力強い声音が響き、大神官は白藤を隠していた紗を取り去った。

艶やかな黒髪に白銀の鎖が揺れ、纏った深い藍の衣裳には白い睡蓮が水面に白く浮き上がり、白い額に瑠璃玉が揺れる。

まさに花のように美しい白い顔に、ほんのりと紅を差したくちびる、額の飾りより深い藍色の瞳が、澄み渡って満座の貴人たちを見渡した。

大神官が手を離すと、ゆるやかに舞うような優雅な動作で広間を見渡し、花びらが開くように微笑んで、軽く目を伏せ会釈する。

水の巫女姫が、都に頭を垂れることはない。

そう言った、最初の言葉は今でも変わらない。

息を飲む音と、ざわめきが、徐々に広がりかかったが、東雲が立ち上がって彼女の手を取った。

「水妃はどこの家にも属さないが、水に属する貴い姫。わが正妃となすことを認めていただいた神殿に感謝する」

「貴い水の巫女姫を都に招かれ、それに姫が応じられたことに、お喜びを申し上げる」

大神官が東雲に答礼し、天藍が引き取る。

「我が東家に、水の加護がなお篤く加わることは、ひいて都に水の加護が加わることを意味する。王と都の繁栄に、我が東家はなお力を尽くすことをお約束する」

杯が掲げられる。

次々と、人の表情が喜びに変わっていく。

「乾杯」

ひときわ高く天藍の杯が掲げられ、彼が一気に干すと、どよめきとも歓声ともつかない声が沸き上がり、そして杯が干される。

上気した、輝く瞳を見つめながら、天藍の言葉があまりにも皮肉なことに、白藤は内心だけで、勝手なことを、と呟いた。東雲に嫁せば、自分は水の姫ではなくなるし、巫女としての資格すら失うというのに。

それは、名前だけで、自分は水と離れていることはできないかもしれないが、もう、巫女としては、水の里には認められない。姫とも呼ばれなくなる。

だから、父は婚儀に来なかったのだ。

「巫女」でもない娘のために、里を開けられるほど、父は軽い立場ではない。最初から、そうやって断ったのは自分だけけれど、あまりの矛盾に居たたまれなくなる。

「水華お姉様」

考えに沈んでいた彼女は、月姫の声に、我に帰った。

「月姫さま？」

「ええ。お母様が忙しいうちにとまって、南の昴さまを連れて参りましたの」

「初めてお目にかかります、昴と呼ばれております」

艶やかな褐色の髪に、灰色の瞳が印象的な少女だった。控えめに、月待の後ろに控えている。

「水華でございます、昴姫。ご挨拶もいたしません、失礼いたしました」

「とんでもございません。母からも伺っておりましたが、これほど美しいお方とは、想像できませんでした」

「お褒めいただき、恐縮です。……月姫、ありがとうございます」

おそらく、朝餐の儀式で初対面ばかりでは、と月姫なりに気を遣ったのだろうと分かる。

「ごめんなさいね、水華お姉様。他の皆様はちょっとお連れできなくて」

「昴姫さま、どうぞお心安く遊びにいらしてくださいませ。月姫さま、ありがとうございます」

「少しはお役に立ててよかったですわ。こういう席では、お兄様は何の役にも立ちませんものね」

この言葉に、昴が小さく笑った。

「姫さまのお変わりにならないこと。お兄様がお気の毒ですわ」

「だって、間違いございませんでしょう？……あら、お母様がこちらにいらっしゃるわ。大変。昴さま、夕凧のところにご一緒しませんこと？沙羅姫さまに挨拶しなければ」

月姫は要領よく西家に挨拶行くのに昴を連れて行った。

そういえば、沙羅姫という先に入った夕凧の妃は南からだと聞いた、と思っていると、藍妃が来た。

「月姫が来ていましたね？」

「ええ、西にご挨拶に行かれるのに、南の昴さまをお連れになって」

「ああ、そういえば、さきに南の方を入れられたのでしたね。あなたは聞かれたかしら？」

「はい。東雲さまから、月姫さまの許嫁のかたのことは伺いました。幼なじみでいらっしゃるとか」

「ええ、そうなのですよ。昴は、南の姫ですが、あの姫のことはよろしい。それより、そろそろお引き取りなさい。着替えなければ、奥の儀式に間に合いませんよ」

「はい、藍妃さま」

「それから、次の儀式より後は、正式には水妃と呼ぶことに決まっています」

「桂から聞いております」

「弁えていますね？」

「はい、藍妃さま」

一礼した彼女を満足げに見やり、それから頷いた。

「その、白の睡蓮は、たしかにこの場では有効でしたね。藍にととても映えて、水面に浮き上がっているようでしたよ」

「ありがとうございます、藍妃さま」

次は、無地の藍に、縫い取りをした飾り帯に着替えることになっている。中着は、水の里から持ってきた純白のものを、仕立て直した。

「では、退出いたします」

「追って、私たちも参ります。奥に桂と波速がいます。急いで」

「はい」

白藤は一礼し、大広間をあとにした。

東雲の内殿での饗宴は、実質これから一晩の儀式に参加する面々の食事という側面が強いらしく、白藤は座っているだけ、というものだった。

ただ、夕凧が言っていたとおり、同じ家とは思えないほどよそよそしい沈黙が漂っている。最初に一人一人が天藍の紹介で挨拶はしたが、藍妃のほうを伺っている気配が濃厚で、柏は戸惑っているし、神官もやりにくそうな表情をしている。

平気な顔をしているのは、当然と言うべきか天藍だけだ。

「水華姫、用意は整ったかな？藍妃に後見を頼んだそうだが」

この場でのその言葉は、計算されたのかどうか、白藤は一瞬考えたが、無難な回答を返した。

「はい。大切な東雲の若君さまに瑕をつけないよう、藍妃さまにはひとかたならぬお力添えを頂きました。ありがたいことと思っております」

天藍は満足そうに頷く。

「女官たちからも、美しい上に聡明、控えめ、優雅と褒める言葉しか聞かぬ。東雲は今日を待ちわびておったから、今は感無量であろう」

「父上。儀式はまだ終わっていません」

「ここまできて、終わらなければ不安とは」

「水華は水の姫。大神官との会見のときのことを覚えていらっしゃいましょう」

「そうだったな。くれぐれも、水の怒りに触れぬよう、大切にするのだぞ」

「天藍さま。お言葉を返すようではございますが、それではわたくしが、まるで水をたてに脅しているようではございませんか……」

「いやいや、そのようなつもりはなかった。外で言うわけではないから、許せ」

「ほら、父上が一番危ない」

「お兄様も危のうございますわよ、ねえ、お姉様？」

月待のことばに、白藤は思わずため息をつきそうになって、こらえた。

「……月姫さままで、そのような……」

「月の口が悪いのはいつものことですよ、水華。さ、少しは召し上がって。でないと保ちませんよ。その果物だけでも」

藍妃が見かねたように割ってはいり、末席に近いところで昴と、もう一人の姫が顔を見合わせる。

「そうだな、……柏どの、あなたも、食が進まないようだが、お口に合わなかったかな？」

「いいえ、そうではなく……」

「伯父は、こうした儀式に慣れていないだけでございます、天藍さま」

白藤は伯父を救済に入り、それから、勧められた果物をひとくち、口にした。

食事の席を立ち、奥の清められた部屋に通されると、立ち会い人として、天藍と柏が抜け出してきて、大神官が厳粛な顔で、水を満たした金色の水盤を中央に置く。

「東の君には言うまでもありませんが、水の里の柏どの。これからの儀式では、都では魂名と呼ばれる、人には明かされぬ名を明かします。決して、口外なさらぬよう、願います」

「この身命に賭けましても、巫女さまの前にて誓います」

「感謝いたします。……東家の嫡子、いま東雲と呼ばれる君に問う。水の姫巫女、水華と呼ばれる娘を娶り、魂名を明かすか」

「……星瀧、という」

りいん、と響くように、音が、こだまする。

「姫は、これに答えるか」

「白藤、と申します」

「双方の父、伯父に問う。偽りはないか」

「誓って」

「姫の仰せのとおりでございます」

柏が言い、大神官は、二人の額に聖水盤の水をつけ、そして杯にとり、一口ずつ飲ませ、それを高く掲げて水盤に戻した。

水しぶきが上がったが、誰一人身じろぎもしない。

「名の誓いは成った。妻問いを見届け、婚儀は成り、水華姫を水妃と呼ぶこととする」
重々しい言葉を置いて、大神官は扉を開いた。

「姫は先に参られよ」

「はい」

歩き出すと、どこで待っていたのか、正装した桂が膝をついたまま、ゆっくりと歩く姫の足元を照らし出し、それから、彼女の姿が消える。近いのは、彼女の部屋に、水を引いた部屋を選んだからだ。

一拍待って、東雲はゆっくりと歩き出し、大神官と、天藍、それに柏が従う。

部屋に入った白藤は、藍の表着を脱いで桂に預けると、水の里から着てきた内着姿の自分を、いとおむように抱きしめた。

一礼して桂が部屋を出て行き、入れ替わるように三人が入ってきて、彼女は慌てて寝台の紗幕に隠れた。

扉際に、神官と二人の立会人は留まり、東雲は寝台の幕に近寄り、声で囁いた。

「我が姫、姿を許して欲しい」

決まり文句、ではあったが、紗幕を上げる手を止めることはなく、東雲はそのまま紗幕に身を入れ、それを見届けてから大神官は音を立てずに二人を促して辞去した。

紗の幕の中、気配に敏感な白藤が、ほっと息を緩めると、出て行った？と東雲が問う。

「はい、東雲さま」

緊張した様子そのままの彼女の頬を撫で、髪を梳いて唇を寄せ、あ、という驚きの声を攫うように口づける。

そして。

誰に知られることもなく、巫女は存在しなくなった。

巫女の終焉

「水華、そろそろ目を醒まして」

優しい声で囁かれて、水華はゆっくりと目を開けた。

用意されていた新しい中着を着た東雲が、優しい瞳で自分を見つめているのに気づき、彼女は、自分の感覚が変わっていることに驚いた。

水が近く、そして、東雲も、驚くほど近い。多分、彼の体調の変化まで分かるほど。

「え…………？」

嫁いだら。

男との関係ができてしまったら、水は遠くなるのだと思い込んでいたのに、驚くほど近く、水音の気配が聞こえる。水脈まで辿れそうなほど、感覚が広がる。

今までが、水の巫女、だったというのなら、今は、まるで水を抱いているような気がする。

「大丈夫？」

眉を寄せて問われて、彼女は慌てて頷いた。

「は、い…………っ？」

答えて、自分の姿に気付いて水華は真っ赤になった。

「一応、着せたんだけどね」

内着が乱れ、合わせがかなりいい加減で、肌があらわになっている。

「外に出るから、用意の内着を中で着なさい。この、薄い青のでいいんだね？」

「は、はい。それから、桂を」

「呼ぶんだね、分かった。あなたは慌てなくていい」

紗幕から出て、東雲はその辺に置いてあった鈴を軽く鳴らし、紗幕の中の「妻」に言った。

「どこか痛みは？」

「え……あの……………」

「やっぱりあるんだね。無理はしないで」

「でも、朝食の…………」

衣擦れの音がして、桂と波速が入ってきた。

「失礼いたします、東雲の若君さま、水妃さま…………？」

「内着に苦労しているようなんだけれど、一人では着られないのかな？」

「姫さま、いえ、水妃さまは表着までお一人でお召しになれますが……………水妃さま、衝立をお出ししますから、少しお待ちくださいませ」

「水もお持ちしております。…………東雲さまも飲まれますか？」

「水華はいつも飲むの？」

「神殿奥から毎朝届けられる、聖なる水でございます」

「ああ、そうか。水華の生命線だね。もし構わなければ頂くよ」

「今朝は、皆様の分を頂いておりますので。水妃さま、お手伝いは？」

衝立をたて、紗幕を上げると、下着を身に付け、内着を羽織った水華が出る。東雲の気配を気にしながら、彼女は内着を素早く綺麗に着付け、藍色に蓮の花の模様を縫い取った表着を桂が着せかけ、波速が硝子の留め具を留めていく。

瑠璃の額飾りまでつけて、水華は衝立から出て、一礼した。

「おはようございます、東雲さま」

「おはよう、水華。さすがに清い水だね」

「はい」

にこりと笑って、水華は差し出された杯を、半ば恐れながら飲み、そして。

沁み込むように感じた水が、まるで外に広がるように感覚が広がっていくのを感じて。

その先に、聖なる水の水源に行ったはずの睡蓮の気配まで、確かに感じて。

巫女はもういないのだと、胸に刻む。

「朝餐の儀式に臨みます。桂、波速、皆様は？」

「さきほどご案内いたしました」

「では、参りましょう、東雲さま」

にこり、と笑って。

水華は、東家の集まる部屋に入った。

水の聖域 藤の姫君

<http://p.booklog.jp/book/68769>

著者 : hatuhi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hatuhi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68769>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68769>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ